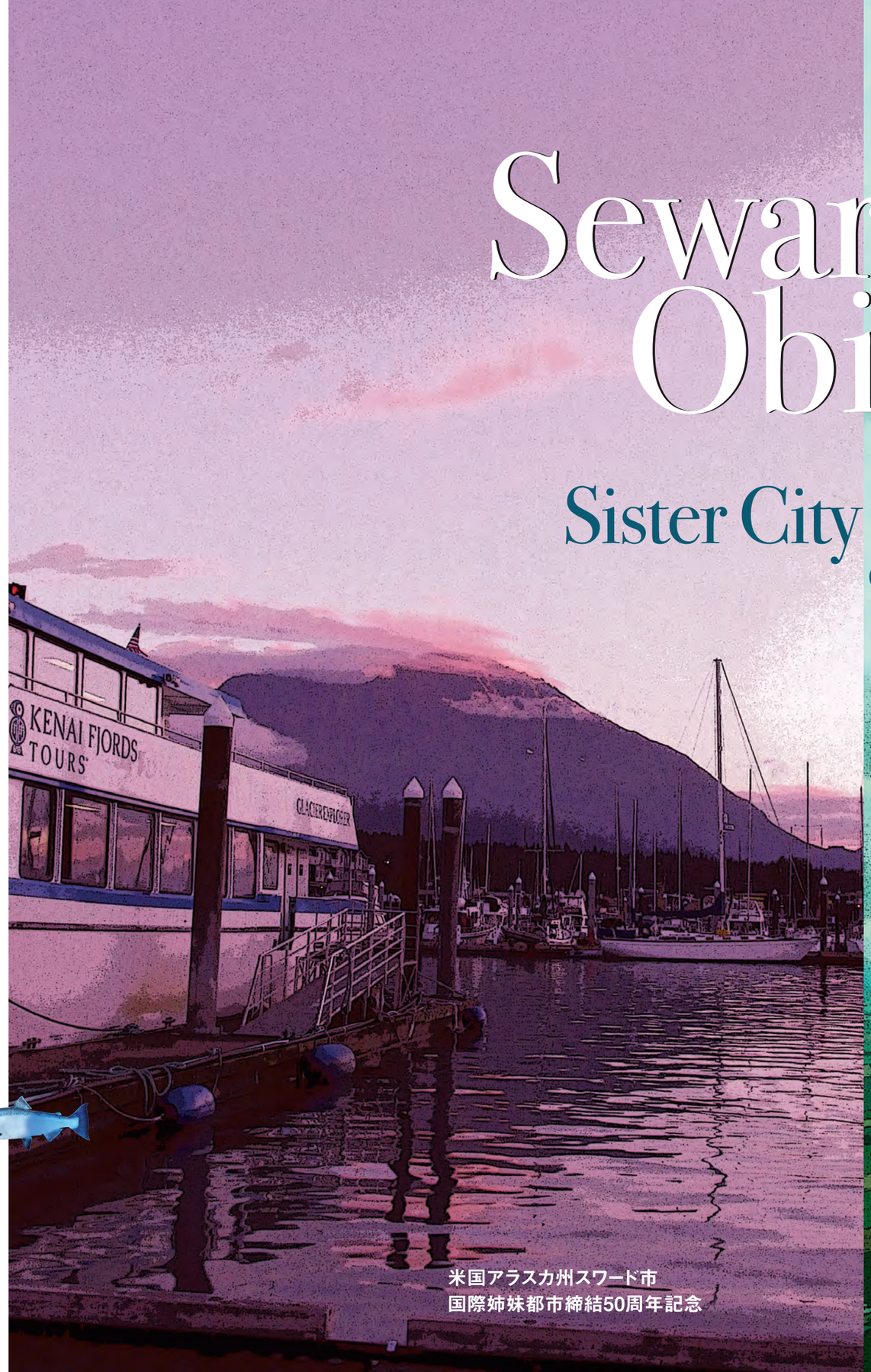
Seward & Obihiro

Sister City 50th Anniversary



米国アラスカ州スワード市
国際姉妹都市締結50周年記念

スワード市国際姉妹都市締結50周年記念事業 記念誌

平成31年3月 発行

編　集/スワード市国際姉妹都市締結50周年記念事業実行委員会

事務局/〒080-8670 帯広市西5条南7丁目1番地

帯広市市民活動部親善交流課内

国際姉妹都市

米国スワード市

人口／約2,600人
面積／55.8ｋｍ
市長／デヴィッド・スクワイアーズ
（2019年3月現在）
産業／漁業・観光業

スワード市は、アラスカ州キナイ半島東岸のレザレクション湾に面したアラスカで最古の港湾都市です。1903年（明治36年）にアラスカ鉄道建設のために入植した技術者により開拓されました。

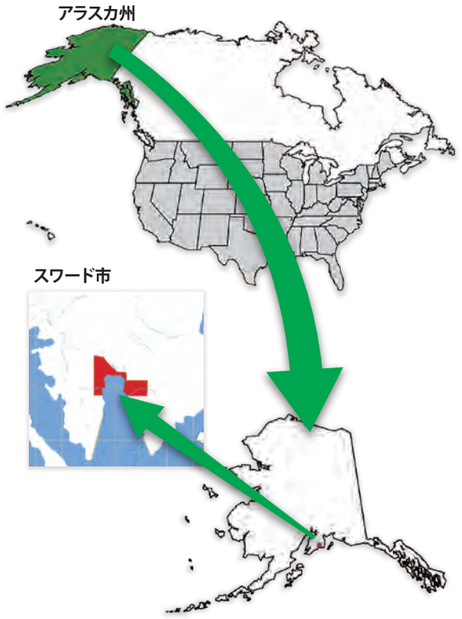
町の名前は、1867年にロシアからアラスカを買い取った、アブラハム・リンカーン大統領時代の国務長官ウィリアム・スワードにちなんで名付けられました。

環太平洋地域の海上貿易を支える重要な拠点となっており、また、「キナイ・フィヨルド国立公園の玄関」としてよく知られる風光明媚な都市です。「キナイ・フィヨルド国立公園」には、氷河期からの太古の歴史をあらわす氷河が広がっています。

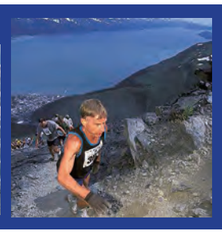
自然豊かなスワード市では、海や川での釣りが有名で、釣った魚の重量を競う「シルバー・サーモン・ダービー」が毎年開催され、地元や世界各地より釣り人が集い賑わいます。

優勝者には、1976年（昭和51年）から帯広市国際親善交流市民の会より、会長賞（カップ）を贈呈しています。

また、マラソン山の崖を登って降りるタイムを競う「マウントマラソンレース」が毎年開催されており、1975年（昭和50年）から成人男・女、少年・少女のクラスごと1位～3位までに、帯広市長賞を贈呈しています。



スワード市の風景・街並



帯広市とスワード市の交流の軌跡

1964年のアラスカ大地震により壊滅的な被害を受けたスワード市の復興事業のため、当時スワード市で輸入業を営んでいた日系二世の川部貞夫氏から日本企業の進出の依頼があり、大園雍彦氏（帯広市内の高校出身者）がスワード市に出張していた際、スワード市から帯広市との交流の仲介を依頼されたことに始まります。

人口規模に大きな違いがありましたが、スワード市の強い要望もあり、また同じ北方圏地域に属することから動植物に類似点があるほか、他国との交流を通して人材育成、相互理解の促進が図られるとの観点から、両市議会の議決により1968年（昭和43年）3月27日に正式に姉妹都市締結に至り、交流を深めてきました。

2013年にはスワード市長をはじめ8名が来帯し、姉妹都市締結45周年を記念して帯広動物園に壁画を設置しました。2014年には帯広市から9名がスワード市を訪問し、スワード市民と壁画を制作しました。完成した壁画はスワード市内の施設に設置されています。

そして、50周年を迎えた2018年8月、帯広市から10名の訪問団がスワード市を訪問し、アラスカ州最大規模の鮭釣り大会「シルバーサーモンダービー」に参加することができました。閉会式では、帯広市長賞、帯広市議会議長賞、帯広市国際親善交流市民の会会長賞を授与しました。

10月には、スワード市からも10名の訪問団が来帯され、「おびひろ菊まつり」でのスワード市長賞の授与や「フードバレーとかちマラソン」へのスワード・帯広両訪問団員出場、森の交流館・十勝の恒例行事「森のハロウィーン」仮装コンテストの審査、おびひろ動物園でのワークショップ「トーテムポールをつくろう！」の実施など、幅広い分野で市民同士の交流を深めることができました。

発刊にあたって

スワード市国際姉妹都市
締結50周年記念事業実行委員会
委員長　後藤 裕弘
Yasuhiro Goto
（帯広市国際親善交流市民の会　会長）

「帯広市国際親善交流市民の会」は、昭和50年6月に、国際姉妹都市交流を推進する市民団体「国際交流市民委員会」としてスタートし、昭和57年に、より一層市民に親しまれ、理解と参加を得られるよう、現在の名称となりました。

今日まで、さまざまな形で帯広市の国際化進展のため力を尽くしてまいりましたが、当会発足当時から見守ってまいりましたスワード市との交流が、50周年という大きな節目の年を迎えられましたことは、大変に喜ばしく、感慨も一入でございます。

これは、国際親善交流に熱意を持つ多くの市民の皆様が、それぞれの都市を訪問し合い、親交を深め、草の根交流が継続されてきた証であり、当会もその一翼を担ってきたものと自負するものでございます。

この度、国際姉妹都市締結50周年記念事業として実施しました相互訪問では、半世紀の長きにわたり育んできた絆を確認し合い、今後の交流への展望を互いに語り合う、実りあるものとなりました。

時代は急激に変化し、気軽に海外の文化に触れることのできる現在においても、異文化を肌で感じること、何より、両市市民の50年の絆の上に成り立つ国際姉妹都市との交流は、インターネットや旅行では感じることのできない温もりと親しみがあるはずです。

両市の交流にまい進されてきた先人たちの熱意に敬意を表しますとともに、本事業により、互いの魅力が両市市民に浸み渡り、この交流が益々発展していくことを願って、挨拶といたします。

発刊に寄せて

帯広市長　米沢 則寿
Norihisa Yonezawa

スワード市との交流は、偶然とも言えるご縁から始まり、この度締結50周年の節目の年を迎えることができました。

これもひとえに、「帯広市国際親善交流市民の会」をはじめ、「スワード百年友の会」など、多くの市民の皆様の熱意とご尽力の賜物と、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げます。

漁業と観光、産業が融合するスワード市と、農業、畜産業などの一次産業と食を活かしたまちづくりをすすめる帯広市は、豊かな自然という共通した背景のもと、経済・行政視察団や合唱団、スクールバンド、壁画の交換などを通じた交流により、幅広い分野で相互理解を深めながら、50年もの大変長い月日を共に歩んでまいりました。

中でも昭和48年から毎年実施している「高校生相互派遣事業」は、50周年のこの年、45回目の実施となり、両市の参加者合計は300人を超えました。文化や習慣の違う、遠く離れた異国の友人と共に過ごした時間は、子どもたちにとってかけがえのないものとなり、その人生を一層豊かにしたことと思います。

そしてこの子どもたちが、今は親となり、その子どもたちが同じように相互派遣に参加することもあるでしょう。

このように長年受け継がれてきた温かな交流を大切に育みながら、両市民が共に歩み、互いに自然豊かで活気ある街として発展し続けられるよう、これからも力を尽くしてまいりますので、関係者の皆様には、引き続きお力添えをいただきますようよろしくお願い申し上げます。

発刊に寄せて

スワード市長　デヴィッド・スクワイアーズ
David Squires

帯広市と姉妹都市提携50周年を記念する年に市長として務めさせてもらえたことは大変に喜ばしいことでした。姉妹都市の交流事業を通じ、様々なレベルで両市の関係が深まりました。この関係は一生の友情となり、帯広市とスワード市の絆が更に強固なものとなりました。

これまでに、多様な人生を歩むスワード市民が帯広市を訪れました。公務員や実業家、教師、商人、主婦、学生もいました。高齢者から若者までが参加するこの交流事業によって私たちの友情は歴史を刻み続け、また将来にわたり続いていくことを確信できるのです。
両市が締結100周年を迎えるとき、今日同様に強い絆で結ばれていることを祈っています。

当市の訪問団を温かく受け入れていただいた米沢市長、大石議長と帯広市のスタッフに感謝しております。
帯広市民の皆様、親切にも快くみなさんの生活を私たちに共有していただいたことは、本当に素晴らしいものでした。

そして私のホストファミリー、永守家に。
ご家庭とご家族の記念日を共有していただき、感謝しております。祐子さんがスワード市に滞在していたとき、私の息子クリストファーと同級生であったことに気が付いたときは、互いに驚きました。遠く離れているように見えても、世界はなんて小さいのだろうと驚嘆させられました。

Contents
目 次

国際姉妹都市スワード市との交流の歴史

交流年表		5～6
1967年	交流のはじまり	7～8
	私と帯広市とスワード市の不思議な縁 大園　雍彦　様	
1968年	姉妹都市締結	9
1970年代	持続的な交流へ　～市民の会設立・高校生相互派遣開始～	10
1980年代	進む文化交流　～合唱団やバンドの相互派遣～	11～12
1990年代	相互理解の深まり　～小中高生の交流など～	13～14
2000年代	交流は益々盛んに　～スワード百年友の会設立～	15～18
	スワード市国際姉妹都市締結50周年を迎えて スワード百年友の会　会長　大友　俊雄　様	
2010年代	成人の交流もより深まる　～ACE・周年事業～	19～20
2018年	交流は半世紀に　～姉妹都市締結50周年～	21～40

交流を振り返って

デヴィッド・キャンベル 様　／　キャンベル・のりこ 様	41
編集後記	42

国際姉妹都市スワード市との交流の歴史 昭和43年3月27日締結から現在まで

派遣関係

昭和43年 3・27 国際姉妹都市締結

昭和46年 9・16～9・26 「帯広市経済視察団」が親善のためスワード市を訪問（吉村 博 団長他9名）

昭和48年 7・21～8・20 第1次 高校生相互派遣 事業開始 窪田 由美、清水 千佳の2名を派遣。以降、概ね毎年実施

昭和48年 12・18～12・19 「北米行政視察団」3名がスワード市を訪問

昭和51年 7・18～7・20 「カナダ・アラスカ訪問視察団」32名（渡辺 真 団長）がスワード市を訪問

昭和53年 6・26 スワード市開基75周年記念式典（7・4）に出席 市長、議長夫妻同行 「第2回アラスカ・カナダ国際親善市民交流の旅」24名（佐野 光男 団長）派遣

昭和56年 7・14～7・16 「第3回アラスカ・カナダ国際親善訪問の旅」14名（前川 博 団長）スワードを訪問

昭和58年 4・24～4・28 「第4回アラスカ・カナダ国際親善訪問の旅」・「帯広 アドニス少年少女合唱団」アラスカ・カナダ公演 一行67名（小野寺 哲也 団長）スワード市を訪問

昭和62年 7・27～8・3 姉妹提携20周年記念事業「夏休み姉妹都市スワード市の旅」一行25名（小中学生20名、大人5名、草森 敏昭 団長）派遣

平成4年 8・3～8・14 帯広市開基110年記念事業「おびひろっ子世界の翼」一行35名（小中高校生30名、引率5名、佐々木 広司 団長）派遣

平成5年 7・25～8・3 姉妹提携25周年記念親善訪問団一行46名（公募による大人20名、小中学生20名、事務局その他、岡田 市議会議長 団長）派遣 あずまや贈呈、ワシの木彫り受取（交流館に設置）

平成15年 7・30～8・7 スワード市開基100年親善訪問団一行（公募18名、報道2名、市民の会3名。市長、議長を含む事務局7名、大園 氏、計31名）

平成17年 7・27～8・7 ACEとして2名を派遣

平成19年 7・22～7・30 ACEとして2名を派遣

平成21年度 新型インフルエンザの影響により高校生派遣・ACE派遣中止

平成22年 7・24～7・31 ACEとして2名を派遣

平成23年 7・23～7・30 ACEとして2名を派遣

平成25年 7・23～8・3 ACEとして1名を派遣

平成25年 8・26～9・2 スワード市開基110周年記念式典出席のため 米沢 市長、議長他3名訪問

平成26年 9・5～9・17 姉妹都市締結45周年事業 壁画制作のため9名訪問（制作者4名、市民の会2名、市民活動部長他2名）

平成30年 8・15～8・24 姉妹都市締結50周年記念事業 相互派遣のため10名訪問 レザレクション湾鉱物のアートピース受取 大石 議長他3名）ステンドグラスの時計を贈呈（市民の会1名、公募による市民4名、米沢 市長 団長、

帯広市経済視察団

初回参加者の窪田さんと清水さん

アドニス熱唱

受入関係

昭和43年 3・27 国際姉妹都市締結

昭和47年 9・30～ 帯広市開基90年市政施行40周年記念式典出席のため、スワード市長 夫妻一行9名が来帯。式典出席（10・1）、市内視察、道東観光等をし、10・13まで日本滞在。

昭和48年 6・25～7・21 第1次高校生相互派遣事業開始 ドーリー！バーダーソン、アーディン・ウィットモアの2名が来帯。以降、概ね毎年実施

昭和48年 9・28 スワード市 訪問団一行5名が来帯 帯広動物園でのヘラジカ贈呈式（9・30）出席のため

昭和54年 8・13～8・18 スワード市民 一行4名来帯

昭和57年 2・17～2・20 スワード市経済視察団6名（キース・キャンベル 団長）来帯

昭和57年 8・7 帯広市開基100年市政施行50周年記念式典出席のためスワード市長 夫妻及び市民、スワード・スクールバンド一行53名が来帯

昭和58年 5・18 スワード市長 一行3名来帯

昭和60年 10・3～10・6 スワード元市長 夫妻一行10名来帯

平成4年 11・22～12・4 帯広市開基110年記念式典出席のため スワード市民32名が来帯

平成14年 10・30～11・6 帯広市開拓120年記念式典出席のためスワード市民21名が来帯

平成16年 8・8～8・16 帯広市・スワード市成人相互派遣事業（ACE）として2名が来帯

平成18年 8・5～8・19 ACEとして2名が来帯

平成18年 9・30～10・2 ステュ・クラーク夫妻来帯 市長表敬訪問

平成19年 9・10～2・22 トラヴィス・ホーグランド君、大谷高校へ半年留学（帯広ライオンズクラブ）

平成20年 8・17～8・20 ACEとして2名が来帯

平成21年 2・28～3・11 トラヴィス・ホーグランド君来帯

平成21年度 新型インフルエンザの影響により高校生受入中止

平成22年 8・6～8・18 ACEとして2名が来帯

平成23年度 東日本大震災により高校生受入中止

平成24年 8・5～8・16 ACEとして2名が来帯

平成24年 10・30～11・3 帯広市開拓130年記念式典出席のため スワード市長ほか3名来帯

平成25年 9・9～9・22 姉妹都市締結45周年事業壁画制作のため スワード市長他7名来帯

平成30年 10・25～10・31 姉妹締結50周年記念事業相互派遣のため スワード市長他9名来帯

初回参加者のドーリーさんとアーディンさん

ホストファミリーと

平原まつりで

元スワード市長
ステュ・クラーク氏

開拓130年記念式典

45周年壁画交換事業

市民の思い出

私と帯広市とスワード市との不思議な縁

大園　雍彦さん
Yasuhiko Osono

もし第二次大戦の敗戦がなかったら、兄が養蜂家になろうと渡道し十勝で病気にならなかったら等々、すべての「もし」が一つでも違っていたら、私と帯広、スワードが繋がることもなく、帯広とスワードの国際姉妹都市も無かったかもしれません。この様に偶然の出来事が世の中を形作っていると考えると不思議でなりません。佐賀出身の父は領事館勤務時代、広島出身の音大ピアノ科卒の母と結婚し5人の子女を設けました。昭和20年の終戦で、満州で財を成していた父は裸一貫で帰国、収入を絶たれた一家はバラバラになりました。末子の私は中学2年を中退せざるを得なくなり、広島と佐賀で生活していました。移動養蜂業を目指し渡道した長兄・大園嘉之は十勝で病気に倒れ蜜蜂は全滅、回復後は忠類中学校の教師として勤務後、川西農高に教師として赴任しました。その兄から「せめて高校位出ておけ」と連絡があり、佐賀駅から母と数十時間汽車に揺られ1950（S.25）5.1に帯広に着きました。普通高校の途中入学が1年遅れとなる為、農高校長の判断で川西農高（現帯広農高）・林科2年に編入させて頂きました。兄の安月給で大学に進学する事等は夢にも考えていなかった高校3年の春、大学進学を兄が勧めてくれました。その年から始まった「進学適正検査」で十勝地区2番の成績となり、一次を兄の知人の息子（三条高校卒・憧れの岡野英樹）さんが進学していた北大・水産学部に、二次を帯広畜産大学に決め独学で受験勉強しました。幸い一次合格が出来（農高初めての現役・北大合格）、在学中はアルバイトに明け暮れました。S27年宝幸水産に入社、北洋鮭鱒母船勤務を経てS40より北米事業を開拓していきました。

1964（S39）1/21～北米事業を始めるにあたり、丸紅社員と2人でアラスカを中心に北米を回り調査しました。帰国して調査報告が終わって間もなく、3/27日、アラスカ大地震の報がテレビから流れました。アラスカ・コディアック島の提携工場の損傷を恐れ問い合わせしましたが大した損傷なしで安心していました、その時まで、まだ見知らぬスワード市が壊滅的な被害にあったことは知りませんでした。

初年度より事業は大きな黒字を重ね、次々に提携工場を増やしていきました。

スワードで財を成したハリー・カワベ氏は1964懇意であった三木武夫元首相に、スワード復興のために日本企業に進出して欲しいと依頼されました。1964秋頃三木元首相、宝幸水産社長・深尾清吉氏、私の３人が赤坂の料亭に集い、スワードの復興の為の進出を相談しました。私がその調査を担当することになり、1965/3/30～4/4日スワード市を訪れました。

丸紅を交えた調査団歓迎会が1967年１/25にスワードで開かれました。その席でスワード側から「帯広市を知っている人はいますか」との発言があり、私が「帯広市は私の第2の故郷で、私の兄が高校の教師をしている」と答えると「帯広とスワードの親善を取り持って欲しい」と翌日書類を渡されました。

当時、調査結果や見積もりなどの作成で忙しかった私は、預かった書類を1967年2月上旬Los Angelesから兄・大園嘉之に帯広市に届けるよう手紙を添え送付依頼しました。

兄は終戦後、オーストラリア軍の通訳をしていて英語に堪能だったので、帯広市に依頼され、英文を翻訳して帯広市に渡し、又帯広市の返事も英文に翻訳して渡しました。その後、江部乙（現滝川北）高校に勤務していた兄が1972/6/21北海道新聞夕刊の「市からの贈り物」「珍しいヘラジカ4頭」の記事を私に送付してくれました。その記事でSewardの歓迎会からわずか1年後の1968年3月に国際姉妹都市締結をしたことを知り（その間5年間私達兄弟はその進展を知りませんでした）、大変喜び合いました。

※　当時の日本は戦後の復興を遂げつつあった時代ですが、日本で我々が作る製品は、1級品はアメリカとヨーロッパに、２級品は東南アジアや南米に輸出し、３級品を日本で使ったり、食べたりしていました。
すべての１級品が日本全土で揃う現在と違い、その当時の日本はアメリカに比べると雲泥の差がありました。
アメリカの田舎に行けば、まだ日本人を敵国人として、ジャップと言う人もいました。そんな時代に日本の帯広市を国際姉妹都市の相手に選んでくれたスワード市に親愛の念を感じたことを覚えています。

私は新聞社に電話し喜びを伝えました。姉妹都市締結の経緯を帯広市側もスワード市側も一切知らなく、私の話で初めて経緯がわかり「ぜひ帯広にいらして下さい」と誘われ、北海道旅行を計画していた私達家族4人で1972/8/9に帯広市市役所を訪れました。

吉村市長は上京されており、木呂子市助役や山本議長、水野市経済部長はじめ市議会議員などと会談しスワードの話で盛り上がり、8/10道新でも報道されました。

私は1975/２月に退社し、計画していた種々の教室経営を始めました。
1972の帯広市役所訪問後約30年間帯広市やSewardの市との交流も無く過ごしていましたが、2002年に北大恵迪寮と帯広農高の最後の同窓会に出席した折、2002/9/27帯広市の砂川市長を表敬訪問しました。その折2003年7～８月のSeward市開基100周年記念行事に招待され参加することになりました。

Seward訪問では、市長のスチュー・クラーク氏宅にホームステイしました。帯広市の皆様方は知っておられましたが、私は市長がウィリアム・スミス・クラーク博士のひ孫であることを知りませんでした。

急遽英語のスピーチにその驚きを入れたいと思い、馴れぬスピーチの変更で絶句したことを昨日のように思い出しました。現地新聞LOGが「35年ぶりに大園が姉妹都市に帰って来た」と報じ大歓迎して頂きました。高校生の相互派遣が行われていることを知り、大人の方々が相互訪問する制度があったらいいなと思い、帰国後。市役所の担当者・森田省吾さんに電話しました。森田さんは「帯広市民の会の羽田野浩利さんに相談したら」と助言して頂き、すぐ羽田野さんに電話しました。それが平成16年より10年間続いた、「帯広市・スワード市成人相互派遣事業※」となり、帯広市民の方々がそれを支えて下さいました。以後　砂川市長、帯広市役所の方々、大友、羽田野両氏を始め交流の会皆々様方の温かいおもてなしを頂き、楽しい帯広市訪問を続けさせて頂き、大変お世話になりました。妻共々当時の懐かしい日々を思い出しては話し合っています。

2006年９/21～10/10　20日間のスチュー・クラーク氏夫妻の日本訪問時に私達夫婦は行動を共にしました。京都、日光の後、札幌では北大や、札幌市民の会、北海道放送の歓迎会があり、翌日からは、大友、羽田野両氏の御計画通り、深川市、帯広市、釧路市での歓迎会や然別湖、層雲峡等の大旅行に藤巻潤夫妻も加わり、心に残る大旅行にスチュー・クラーク氏夫妻も大変喜ばれていました。

帯広市と私の不思議な縁は冒頭に述べさせて頂きました。兄は帯広市の先生を長く務め、母は帯広で亡くなり、妻の父佐々木茂一と私の親友・武田正之は十勝支庁長をしておりました。帯広は私の再起をさせてくれた大切な町です。帯広は何かを生み出す力に漲っています。帯広市とスワード市は何をとっても似ていない、なんで両市が姉妹都市になったか?と疑問視される方もいるでしょう。しかし世の中では異物が程よく混じり合うと別の優れたものが生み出されることが多々あります。この温かみと包容力があり、物を作り出す力がある帯広市と大災害にみまわれ見事に復興したスワード市が仲良く、今まで通り程よく交わり合い、お互いが刺激しあい、ますます発展されることを、心から切に切に願っています。

※帯広市・スワード市成人相互派遣事業
Adult Citizens Exchange (ACE) Program

両市の友好親善のさらなる推進を目的に、大園様から帯広市国際親善交流市民の会へいただいたご寄付を基に、平成16年から開始しました。事業終了となる平成25年までの間に、スワード市からは10名が、帯広市からは9名がそれぞれの市を訪問し、交流を深めることができました。

1968年　姉妹都市締結

十勝毎報　昭和42年2月13日（月曜日）

帯広市――アラスカ州・スワード市

姉妹都市の話すすむ

自然がよく似ている

帯農高の大園先生が仲人役

アラスカ在住　大園さんの弟が縁

産業、文化交流に期待

帯広市とアラスカのスワード市との姉妹都市提携の際し合いが進んでいる。仲人役は帯農高の大園やすさん。大園さんの弟、やす彦さん（仮名）がアラスカに行っているが、スワードの市長さんから「ぜひ帯広市と姉妹都市の提携ぜひ」と頼まれ、帯広市の田上助役さんと相ちかけた。

帯農高の先生が仲人役

帯広市とアラスカのスワード市との姉妹都市提携の際し合いが進んでいる。仲人役は帯農高の大園やすさん。大園さんの弟、やす彦さんがアラスカに行っているが、スワードの市長さんから「ぜひ帯広市と姉妹都市の提携ぜひ」と頼まれ、帯広市の田上助役さんと相ちかけた。

スワード市は、帯広市と自然の風物がよく似ていて、サケ・マス資源に恵まれ、両市の産業、文化交流に大きな成果をもたらす期待されている。

大園やすさん

帯農で英語の教師をしている大園やすさんの弟、やす彦さん（仮名）は、帯広市の「日本の帯広市を知っている人は、特に大園さん（仮名）と聞き、大園さんが「帯広市で育ち、二十七年間広尾農高校に勤務、帯農に来て、北大で農学を学んだ」と信用されている。

この市長が感じているように市長が「日本の帯広市を知っている人は、特に大園さん（仮名）と聞き、大園さんが「帯広市で育ち、二十七年間広尾農高校に勤務、帯農に来て、北大で農学を学んだ」と信用されている。

大園さんは日本人三人は、スワード市のカークパトリック市長から紹しまれ、特に大園さん（仮名）は「ファースト・マン」とよばれ「仕事のやる男一の」と信用されている。

この市長が感じているように市長が「日本の帯広市を知っている人は、特に大園さん（仮名）と聞き、大園さんが「帯広市で育ち、二十七年間広尾農高校に勤務、帯農に来て、北大で農学を学んだ」と信用されている。

大園さんは日本人三人は、スワード市のカークパトリック市長から紹しまれ、特に大園さん（仮名）は「ファースト・マン」とよばれ「仕事のやる男一の」と信用されている。

田上助役さんと問い合わせてきたが、帯広市の田上助役や大園さん（仮名）がいらっしゃいには「それはちがう。三年前、テンベ市もあるのスワード市などが姉妹市の提携があったが、その後立ち消えになっている」とわかった。

前記、カークパトリック市長の感激ひとしおかったが、スワード市は自然が帯広市とよく似ており、サケ・マス、木材などの豆資源があっている。

大谷子総務部長は「この提案を生かし、両市の産業、文化の交流を発展する共通の基盤がある」と乗り気。帯農の大園先生に「市長と相談してみます」と約束した。

とにかく、カークパトリック市長は「日も早い提携ぜひ」を言葉を尽くして待っている。日本の子供と仲よくしてほしい、とのいっている。

日米間の産業、しいては経済開発、技術と分配での技術、資源交換はいきに「でも行なわれるのだ。さて、宮沢市長がどう判断するか、この談話は吉村さんの胸三寸にある。

十勝毎報　昭和43年4月18日（木曜日）

帯広市

正式に、姉妹都市

吉村市長　宣言文に署名

スワード市

宣言文に署名する吉村市長（市長室で）

帯広市とアメリカのスワード市との姉妹都市の提携が、十六日正式に姉妹都市の提携ぜひ。

アメリカのアラスカ州スワード市と帯広市との交流は、昨年の夏から続けられており、子供の作文や図画の交換など盛発が行なわれていた。

ところが、ことし二月にスワード市のカークパトリック市長から「本市は興奮もはかり、貴市と姉妹都市となるよう正式に決定しました」と、電報を送ってきた。

この、気の早いパトリック市長には、宮沢帯広市長もいささか面くらった感じ。だが、即刻、文化交流の交流に役立てばと、サケのキングサーモンの生まれ故郷ということもあって、三月帯広市議会に提案、賛成多数で姉妹都市が議決された。

これにより、宮沢市長は、十六日午後零時半、市長室で姉妹都市宣言文に署名した。

宣言書には「帯広市は、スワード市と相互に文化、産業、経済の友好的交流をはかるとともに、世界平和の恒久を確立するため、姉妹市協約を締結することを市議会の賛同のもとに公文書をもって宣言する」と書かれている。宣言書は、ボくスワード市に送られるが、帯広町の武藤の婦人会がスワード市「手まり」をプレゼントしたい、などの申し入れがあり、両市の友好親善ムードが高まりつつある。

1970年代～　持続的な交流へ　～市民の会設立・高校生相互派遣開始～

市民の思い出

メアリー（ウォーン）ダニエルさん　Mary（Woern）Daniel　（思い出の年1976年ほか）

私たち家族には、姉妹都市プログラムによる温かな思い出がたくさんあります。

最初の交流は1976年頃で、帯広からの訪問団がスワードへ来られた時でした。スワード市小学校の屋外でバーベキューを行いました。1980年にはバンドが来られ、7月4日の独立記念日を祝う演奏をしてくださいました。ある年にはランナーのグループが有名なマウントマラソンレースに参加されるというお話もありました。レース参加は実現しなかったものの、山を駆け上がって行かれました。これらは、姉妹都市プログラムの始まりの頃の思い出です。スワード国際友好協会が組織される前から、私はホームステイやアクティビティの運営をお手伝いしてきました。

長年、我が家ではたくさんの高校生や大人のホームステイを受け入れてきました。1980年には、息子のブレット・ウォーンが派遣高校生の一員として、1982年には娘のマーシー・ウォーンも派遣高校生かつ高校のバンドや合唱部員として、帯広市へ行きました。私自身も音楽グループの引率として、またブレットが訪問したその時にはブレント・ウィットモアさんの撮影アシスタントとして再び帯広市を訪問しました。そして2008年には、幸運にもマーシーと私が成人派遣者として選ばれたのです。私たちは、この成人派遣を実現してくださった大園さんにとても感謝しています。

私たちは長きにわたりたくさんの友情を育んできました。何年もの間、手紙を書いたり、クリスマスカードを送ったりしています。東京の空港で私たち夫婦が乗り継ぎを待っていた時に出会ったマツモトテイイチさんのように、一度会った人は友人です。このプログラムによる恩恵は計り知れません。私たちは日本の文化や人々について多くを学ぶことができました。帯広のみなさんにも、私たちの文化を知っていただくお手伝いをしたいと願っています。こうして得た知見は、私たちの間に調和を作り出すことができると思います。これからも長くスワード・帯広姉妹都市プログラムが続くことを祈っています。

マーシー・ウォーンさん　Marci Woern（思い出の年1982年）

1982年、高校生の時に初めて帯広市へ行きました。この年は私の高校の吹奏楽部と合唱部が帯広市を訪れた年で、私も両方に所属していました。吹奏楽部と合唱部では、帯広のほか、札幌、釧路、広尾へ行きました。私が体験することのできた文化、食べ物、言葉に驚きました。

私が小学生のころ、日本からの訪問団がスワード市へ来られ、お祝いをする機会があれば、両親は私に参加するよう勧めてくれました。70年代に太鼓のグループが来られ、当時のボブ・リチャードソン市長が大きなパーティを開催したことを覚えています。私には中学生の頃からタムラアキコさんという文通相手がいたのですが、デイヴ・ディーグラフさんの計らいにより彼女と会うことができました。私が実際に相互派遣に参加するまでは、スワード市へ来られた学生の歓迎活動にも携わっていました。私の兄弟であるブレット・ウォーンは1980年に帯広市へ行き、私たちも何度も帯広市からの学生を受け入れて、言葉や物語、音楽を共有してきました。

2008年には成人訪問団として再度帯広市へ行く機会に恵まれ、この時には母、メアリー・ダニエルが旅の伴侶となりました。母と一緒に旅をして、新たな経験を共有できたことは一番の思い出ですが、長年に渡りお付き合いのあった全てのホストファミリー（マツモトテイイチさん、菊池由記子さん、高橋貴代美さん）との再会も、この経験を一層特別なものとしてくださいました。私たちは、日本文化がより西洋風に近代化され、私たちの記憶にあった伝統的なものを見つけるのに苦労することにすぐに気が付きました。真鍋庭園や茶道教室、藤丸、グリーンパーク、花火大会に続く平原まつりでの盆踊りへは、もう一度訪れたい想いでいっぱいです。25年前とは違うよね、と日本の友人にはよく言うのですが、テイイチは「あなたは私たちが忘れてしまっていることを思い出させてくれるタイムマシーンのようだね。」と答えてくれました。

母と私には、未だにクリスマスカードやメール、フェイスブックで交流を続けている帯広の友人がいます。姉妹都市交流が今後も続き、高校生や成人の相互派遣事業によって、文化が共有され、太平洋を越えた新たな友情が生まれることにつながるよう願っています。

市民の思い出

田本市長の激励を受けるアドニス合唱団

昭和58年4月21日（木曜日）　（第3種郵便物認可）　十勝毎日新聞

帯広アドニス熱唱

アラスカ・カナダ公演　出発控え壮行会

二十三日に出発する「帯広アドニス少年少女合唱団アラスカ・カナダ公演、第四回アラスカ・カナダ国際親善訪問視察の旅」の合同壮行会が、二十日夜、帯広東急インで開かれた。

これは国際親善を深めようと帯広市国際親善の交流市民の会（笠井治男会長）の主催によるもので、同合唱団の海外訪問は昨年に続いて二回目。この日は、合唱団員とその父母、訪問視察の旅団員や市民の会役員など百二十人近くが集まった。

壮行会では笠井会長のあいさつに続いて、団員たちが自己紹介をし、「海外の皆さんに喜んでもらえるようがんばります」と述べた。その後、来賓として田本帯広市長が「音楽は身近な国際親善の道具。元気に演奏してきてほしい」とあいさつ。続いて行われた親睦会では、同合唱団による「バッハのコーヒーカンタータ」などの熱唱が披露された。一行は二十三日午前九時十四分発、おおぞら号」で出発する。

日戸　智奈美さん　Chinami Hinoto（思い出の年1983年）

1983（昭和58）年、姉妹都市親善交流事業としてアドニス少年少女合唱団の演奏旅行でスワード市を訪問しました。滞在中のホームステイではとても温かく迎えてくださり高校生だった為会話もままならない状況でしたが辞書を片手に身振り手振りでも充分に交流する事ができました。

日中は小・中学校でのコンサート。昼食も学校で生徒達と給食をいただき夜は市民の方々が演奏会場に足を運んでくださりスタンディングオベーションをしていただいた事が忘れられない思い出です。

市民の思い出

久富　徴子さん　Motoko Hisatomi（思い出の年1983年）

平成30年9月16日にお亡くなりになりました岩井照清先生が、姉妹都市スワードでの演奏旅行へ、当時20代の私を帯広アドニス少年少女合唱団の引率メンバーの一人としてお誘いくださいました。当初の役割はピアニストの譜めくりでした。ところがこのツアーでは譜めくりだけではなく、「帯広地方の子守歌」をソロで歌わせていただいたのです。岩井先生のお取り計らいでした。

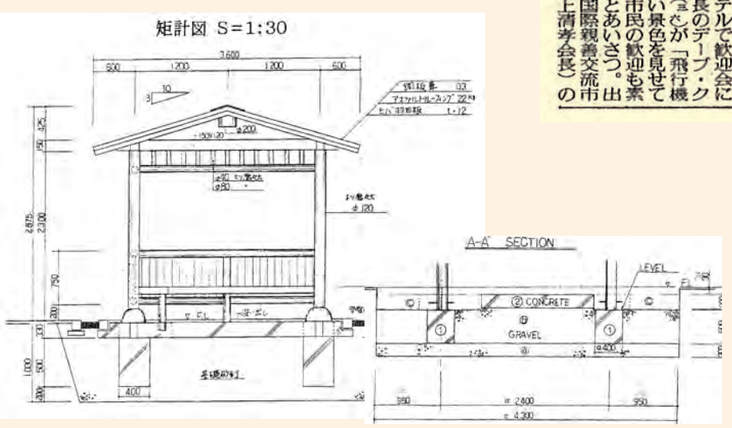
心に残っている事は、スワード市でホームパーティーに参加した時に、老若男女問わずその当時流行っていた歌をピアノを囲んで歌い楽しまれていた光景でした。私たちも楽譜を見せてもらいながら一緒に歌ったのでした。その雰囲気にはとても感動しました。（私たちはみんなで歌える歌ってあるんだろうか？「なんて素敵なんだろう。」と…）

また旅の後半のアドニスの演奏の最後の曲で、会場から聞こえる割れんばかりの拍手と共に、涙が頬を伝わりました。その時の感動は今でも忘れられません。今年私は帯広アドニス少年少女合唱団の指導者として岩井先生から引き継ぎました。このスワード市への訪問なくして今日はなかったと思います。

そして原稿依頼のお話をいただいてからふと思い出し本棚を覗くと、スワード市の方から送っていただいたミュージカルの楽譜が出てきました。なつかしくその楽譜を手に取り、ピアノに向かって歌いました。

市民の思い出

帯広市開基110年の翌年、
締結25周年を記念して
「市民の会」からスワード市へ
寄贈されたあずまや



平成4年(1992年)11月26日（木曜日）　(第3種郵便物認可)　十勝毎日新聞

110年の歩み…表情さまざま

特別功労者、故中川一郎氏の表彰を受ける貞子夫人

帯広市　盛大に記念式典

今冬初めての本格的な雪に見舞われた二十六日、帯広市開基百十年式典会場の帯広市民文化ホールは入り口付近が混雑。市職員など関係者は気をもんだが、式典そのものは予定通り進み、百十年にかかわるさまざまな表情が見られた。

アイヌ古式舞踊を披露

○…アイヌ古式舞踊を披露したカムイトウウポポ保存会の吉根正治郎会長(七〇)は「私は和人だが、生まれてすぐに母がなくなり、アイヌの女性に育てられた。その恩義に報いるために葬式などに立ち会ってきたが、昭和三十年ごろから文化の伝承も手がけるようになった」と回想。「練習はいつもやってきた」という自信の踊りを披露して、出来に満足そうな表情を見せていた。

スワード市から10年ぶり訪問団

○…百十年を祝って、海外姉妹都市のアメリカ・アラスカ州スワード市から三十一人の親善訪問団が二十五日、来帯。公式訪問団の来帯は、昭和五十七年の開基百年以来十年ぶり。

午後四時に市役所新庁舎に到着すると、高橋幹夫市長以下、市幹部が総出で出迎えた。十一階展望ホールや議会棟などを見学したり、帯広のPRビデオを見た一行は「素晴らしいまち」と口をそろえて満足げ。

同日午後六時からは帯広グランドホテルで歓迎会に臨み、同市長のデープ・クレーン団長(三七)が「飛行機の上から良い景色を見せてもらった。市民の歓迎も素晴らしい」とあいさつ。出席した帯広国際親善交流市民の会（川上清孝会長）の会員ら帯広市民約五十人と姉妹都市談議に花を咲かせた。ホームステイで互いに行き来した経験を持つ人も多く、抱き合って再会を喜び合っていた。

88歳以上の225人を表彰

○…式典の表彰では、市内で五十年以上生活している八十八歳以上のお年寄り二百二十五人も表彰を受けた。代表して高橋市長から表彰状を受け取った福田関次さん(九一)＝豊西町西五＝は「帯広に七十年以上住んでいるが、こういう表彰を受けられるとは思わなかった」と話していた。

楽しい語らいの場が広がったスワード訪問団歓迎会

市民の思い出

佐々木　朋子さん　Tomoko Sasaki（思い出の年1993~1996年頃）

私が初めてスワード市民と会ったのは小学生の時でした。スワードの高校生が交換留学で家に泊まりに来ました。初めての外国人を目の前に嬉しい気持ちと恥ずかしさでいっぱいだった思い出があります。

それから何度かスワード市と交流があり21歳の時に留学し、友人のアパートに住むことになりました。お土産屋(Brown & Hawkins)を手伝いながら語学学校へ行きました。

山と海に挟まれた小さな町では、ムースが道をふさいだり、海で熊が鮭を捕っていたり、大きな氷河が崖から崩れ落ちたり、空満点の流れ星を寝そべって見たりとダイナミックな自然を間近に体験する事ができました。

素敵な思い出が多くあり、機会があれば次回は子供たちを連れてまた訪れたいと思います。

廣瀬　貴章さん　Takaaki Hirose（思い出の年1996年）

●フィヨルド見学
●フェリーでの釣り（50cm位のスズキ?が釣れた）、その後船酔い。
●移動の飛行機内で高校生なのにビールorワイン?と聞かれた。

長谷川　道正さん　Michimasa Hasegawa（思い出の年1998年）

初めてホストファミリーをしました。

来日する学生さんは日本語を話せると思いましたが全く話せませんでした。辞書ひきながらやっと会話をしました。何とか通じました。とても良い思い出になりました。

長谷川　絵理子さん　Eriko Hasegawa（思い出の年1998年）

ホストファミリーのパパサンがセスナで氷河を見につれてってくれました。

市民の思い出

「スワード市国際姉妹都市締結50周年」を迎えて

スワード市の想い出と「スワード百年友の会設立」

帯広市国際親善交流市民の会相談役
スワード百年友の会　会長　大友　俊雄
Toshio Otomo

2003.7.27「親善訪問団壮行会」
砂川市長・鈴木議長夫妻と

国際姉妹都市スワード市へは、昭和51年(1976年)・平成5年(1993年)と、「スワード市開基100年記念」平成15年(2003年)の三度、帯広訪問団員として訪れています。

スワード市を訪問する度に思うことは、生活文化経済などの成長が顕著で、その発展は毎回目を見張るものがあります。

観光と漁業の町スワード市は多くの観光客が訪れ、人口3,000人弱の町も一万人を越える人が集まり、世界各地から豪華客船が港に多数寄航、各キャンピングカー駐車場は収容台数約500台から600台ありモーテル数も多く、24時間営業スーパーや釣具店はかなりの賑わいで、レストランの夕食時は時間待ちするほど混み合っています。

北海道で生まれ育ち大自然は熟知していると思っていましたが、スワード市の大自然は想定外、その雄大さは抜群で「北海道は箱庭だ」と思わせるものがあります。

圧倒される大氷河・アラスカ鉄道・キングサーモン、オヒョウ等の釣り・クルーズ船上からの「可愛いラッコ」「巨大なトド・クジラ」「堂々と泳ぐシャチの群れ」「スワード市象徴の鳥エトピリカ」など野生動物の出会い、ヘリコプターによるアラスカ山脈探訪、犬ぞり体験等々。

私もモーターボートで海釣りに挑戦し、竿に3ｋｇの錘付けイワシを餌に巨大シャケ６尾を吊り上げる大漁の、とても楽しい経験をしています。

自然環境で特に驚いたことは、ホームスティ宅の庭に超巨大な「ヘラジカ」が突然現れ、悠然と歩き去って行ったことでした。

治安が優れ、ほとんどの各家庭が玄関に鍵をかけていないことも大きな驚きでした。

永年に亘るスワード市との訪問で特に学ばせていただいたことは、人と人の交流のあり方でした。

2003年の訪問ではスワード市からアンカレッジまで列車で片道４時間20分も掛かる行程を、クラークスワード市長はじめ小学生の方々が、手に手にイラスト入りの日本語「こんにちは」「もしもし」「ようこそ」などを書いた画用紙を手に、なんと日本の歌「カエルの歌が聞こえてくるよ…」と元気良く可愛らしく合唱してお出迎えいただいたこと。

ホームスティでは心温まるありのままの生活様式の中で、肩肘張らずいつも笑顔で胸襟を開いて接し、市内の案内や三食を共に過ごしていただいたこと。

スワード市内を散策中、市民の皆様が帯広市の親善訪問団と知っていて、「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」など簡単なご挨拶をいただき驚いたこと。

多くの市民が自身や子弟の帯広市への訪問、ホームスティ、高校生派遣事業などで、また帯広市の受け入れ事業や民間交流を通して、親睦友好をより深めていただいていること等々でした。

スワード駅での横断幕

また今回の訪問で一番の出来事は、スワード市と帯広市の国際姉妹都市提携の橋渡し役、大園雍彦氏と旧知のごとく知り合えたことでした。このことが民間でのスワード市との友の会設立への機運に繋がっていきます。

2003年の「スワード市開基100年記念」訪問団員は旅行中とても仲が良く結束も固く、胸襟を開いたお付き合いの中「スワード市との民間交流会を立ち上げよう」との話が誰からとなく持ち上がり、帰国後の2003年9月27日に「森の交流館・十勝」で、千葉県から大園雍彦氏も駆けつけていただき、参加者27名で第一回目の会合を開催。

2004.8.4 スワード市デビーさんナオミさん歓迎会

スワード市との民間交流会名前の最初の(案)は「スワード市友の会」でしたが、団員から「永く交流が続けられるよう、「百年」を入れたら…」と提案があり、満場一致で「スワード百年友の会」と決定され発足しました。

以来、今日まで新年会・野遊会・忘年会・パークゴルフ大会・大園基金スワード市派遣者壮行会、スワード市派遣者歓迎会・スワード市在住国際姉妹都市尽力者　川部栄子様歓迎会・元スワード市長クラーク夫妻歓迎会・帯広開拓１３０年、市政施行８０年記念歓迎会・スワード市姉妹提携４５周年、スワード市壁画訪問団歓送迎会・スワード市国際姉妹都市締結５０周年記念歓迎会など等、精力的に会の運営を行っています。

2007.10.26 大園雍彦様歓迎会

これから先も、今年姉妹都市提携５０年になるスワード市と帯広市が、当会の名前のように末永く交流の輪が続きますよう願い、スワード百年友の会会員皆様と共に努力邁進する所存でございます。皆様のご協力を何卒よろしくお願い致します。

2012.12.2 帯広市開拓130年・市政施行80年記念

2013.9.10 スワード市壁画訪問団歓迎会

当時の交流の様子

クラーク元市長、弓道体験

結構なお点前でした

また帯広に来てね!

スワード高校生をお出迎え

森の交流館・十勝で絵本読み聞かせ

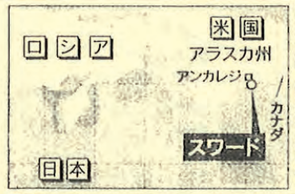
十勝毎日新聞　2003年(平成15年)8月12日(火曜日)

スワード友好の旅

訪問団同行リポート ◇1◇

姉妹都市の友人 温かく歓迎

ホスピタリティー



◇子供たちの歌声

「こんにちは」

「ようこそ」

7月31日午後9時10分。アンカレジ空港に降り立った親善訪問団の目に、歓迎の言葉を書き込んだ画用紙を持った子供たちの姿が飛び込んできた。横にはスワード市のステュー・クラーク市長。「カエルの歌が…」、子供たちのかわいらしい歌声は長旅の疲れを一気に吹き飛ばした。

「いやぁ、驚いたというか感激した。何かヤル気が出てきたね」。訪問団初参加の肱岡章宏さんは興奮気味に語った。

◇手作りの垂れ幕

帯広市の国際姉妹都市、アラスカ州スワード市。帯広の訪問団は毎回、スワード側のホスピタリティー（もてなし）のうまさに感心させられてきた。開拓100年のス市は今年、「姉妹都市の友人を温かく迎える」ことを記念事業として位置づけている。そこには格式ばった式典などない。

8月1日。早朝のアンカレジからアラスカ鉄道に揺られること4時間。スワード駅に到着した訪問団を待ち受けていたのは、手作りの垂れ幕を掲げた住民たちの出迎えだった。

前回（1993年）に続いて参加した馬場雅子さんは、「群衆の中でフルネームで呼び掛けられた時は喜びが爆発した。スワードに戻ってきたんだーと実感した」と語る。

同日夜、郊外のレストランで開かれた歓迎夕食会。36年前、両市の姉妹縁組の橋渡しをした大園雍彦さん＝千葉県在住＝も特別ゲストとして招待され、スピーチを依頼された。

「両市の実りある関係が永遠に続くことを期待します」と締めくくった大園さんに、ス市側の出席者全員が1分間以上のスタンディング・オベーション。これには大園さんも「想像以上の歓迎ぶり」と目を丸くした。

◇白米と焼き魚

翌2日の朝。団員の松浦一平さん、榎波修さんの2人は、ホームステイ先のロンダ・ハバードさんの自宅で、思いがけないもてなしを受ける。食卓に白米と焼き魚（当然、サーモン）が用意されていたのだ。

「朝食を見て『まさか』と思った。アメリカの料理に慣れることができなかったので本当にうれしかった」と、70歳の松浦さん。聞けばこのロンダさん、ご主人は現役の漁師で魚料理にはくわしいとのこと。

訪問団にとって到着早々、「真心」という直球を放られた形。「スワードは行かないと、その良さは分からない」とある団員が車中で語っていたが、「なるほど」とうなずけた。私たちの旅は上々の滑り出しを見せた。

◇　◇　◇

（日時は現地時間）

勢ぞろいした親善訪問団の団員とスワードの関係者（1日、スワード市役所前）

帯広市と米国アラスカ州・スワード市が姉妹提携して35周年。これを記念して派遣された帯広市の親善訪問団（団長・砂川敏文市長）に同行、スワードの模様をリポートする。（能勢雄太郎）

肱岡　章宏さん　Akihiro Hijioka（思い出の年2003年）

旅の思ひ出 in Seward

2003年3月ハッピーリタイアしました。思い切って（スワード市へ）行く事にしました。

OBIHIRO－CHITOSE－HANEDA－NARITA－SEATTLE－ANCHORAGE－SEWARD,TRAIN ALASKA RAILROAD

HOME STAYのJim＆Lewis宅では、ジャグジーなるものに入り驚かされました。また、大きな犬のカリーが歓迎してくれて嬉しくなりました。Fluentlyではない英語でもよく通じ、ハッピーな日々でした。

彼らとは今でも手書きのレターのやり取りをしています。

（当時のスケッチ）

高橋　陽香さん　Haruka Takahashi（思い出の年2004年）

この度は、50周年おめでとうございます。

スワード市で過ごした数日間はとても楽しく、今でも鮮明に思い出すことができるほど、自分にとって大変良い経験になったと思っております。中でもスワード市への留学で、教師になる夢を固めることができたことが何よりも自分にとって一番の思い出です。

留学中、私はスワード市の小学校を訪れる機会がありました。そこでは小学生に日本の伝統や文化である折り紙や手遊び、日本の歌などを教えました。小学生達の日本について学ぶ意欲や上手にできた時の達成感を身近で感じることができ、教える楽しさを知ることができました。そしてそれが、教師になる夢へ背中を押してくれた経験となりました。

自分の夢に影響を与えてくれたこの交換留学には本当に感謝しております。スワード市との交換留学に携わっている関係者の方々、誠にありがとうございました。これからもスワード市との良き交流が続き、高校生達に夢や希望を与え続けてくださることを願っております。

市民の思い出

ジム・ハーバートさん　Jim Herbert（思い出の年2010年）

2010年の夏にACE事業で帯広市に行きました。一緒に派遣されたのはスザンヌ・リーダーさんでした。私達それぞれの娘たちも同時に高校生相互派遣事業で帯広に行きました。一緒に行きましたが、あまり会えなかったです。

滞在中に西島啓喜夫妻に大変お世話になりました。親切で、いつも優しい夫婦でした。西島家で過ごし、日常生活を過ごせたことはとても有意義でした。帯広では一度も欧米人を見かけなかったことが面白かったです。ちなみに、帯広に行く前にヒロさんは同じようにACE事業でスワード市を訪れ、私の家に泊まりました。

珍しい蜘蛛の浴衣、お似合いです

茶道体験

また会いましょうね

忘れられない思い出がたくさんですが、特に思い浮かんだのが帯広市におけるゴミのリサイクルや処理システム。リサイクル施設や先進的な焼却炉を見学しました。道路がすごくきれいだと思いましたし、ごみ箱が倒れてごみが散らばったことで、ヒロさんが迷惑そうにしていた記憶があります。

興奮と熱狂のお盆祭りがとても楽しかったです。派遣された大人も高校生も、いただいた浴衣で踊りました。人が多かったですが、祭りの最後にあった花火大会は最も印象的でした。一生忘れられない思い出です。

滞在中、ヒロさんと奥さんは様々なところに連れて行ってくれましたが、一番感動したのは出発直前のご飯でした。小さな店の、小さな部屋に4人。畳や掛け軸があり、伝統的な音楽も流れていました。素晴らしく準備された料理が、伝統的な衣服を着た接客係によって次々と運ばれてきました。穏やかな雰囲気の中、五感で体験できました。皆さんと過ごせて最高でした。

日本で貴重な体験をさせていただき、本当に幸運だと思っています。

特に、西島家と出会えてよかったです。

トム・クレモンズさん　Tom Clemons（思い出の年2012年）

素晴らしい人に出会えたこと。
美味しい食べ物を食べたこと。
少年合唱団を観たこと。
湖への旅。
警察署長に会ったこと。
良い旅でした。
また行けたら嬉しい。

送別会で市民の会の村中理事と

平原太鼓を鑑賞

市民の思い出

掲載日：2013年09月21日，面名：総合１面，　(C)十勝毎日新聞社

帯広・スワード友好の壁画

おびひろ動物園で除幕式

帯広とアメリカ・アラスカ州スワード両市が姉妹都市締結45周年を記念して共同制作した壁画の除幕式が21日、おびひろ動物園（帯広市緑ケ丘2）で行われた。多くの市民が見守る中、両市の友好のシンボルが披露された。

壁画は11日から1週間ほどをかけて、スワード市から訪れている壁画協会の会員7人と帯広市民が協力して描いた。縦2・4㍍、横9・7㍍の大きさで、園内の売店「カンガルーポケット」の正面に設置されている。

題名は「Friendship Across Water（海を越えた友情）」。アラスカを代表する動物のヘラジカ、クジラ、ワシが太平洋を渡って日本のツルに花を届ける様子を描き、両市の末永い友好関係への願いを表現した。

午前9時半、緑ケ丘保育所の年長児童15人のカウントダウンに合わせて、米沢則寿、デビッド・シーワード両市長ら8人が幕を引き、壁画が現れると多くの来園者から拍手が起きた。

米沢市長は「期待通りの素晴らしい出来。絆と友好の証しに感動した」と述べ、シーワード市長は「全ての帯広市民に見てもらい友情を感じてもらえたら」とあいさつした。（伊藤亮太）

原画をトレース
高校生ボランティアも活躍
制作風景

壁画を眺めるスワードの制作メンバーと来園者（21日午前11時5分ごろ、折原徹也撮影）

掲載日：2014年09月25日，面名：総合１面，（C）十勝毎日新聞社

帯広の壁画完成祝う　米スワード市

【米国スワード市】帯広市と米アラスカ州スワード市の姉妹都市締結45周年を記念した壁画交換事業で、帯広側の訪問団（池田団長、9人）が現地で制作を進めていた壁画が完成した。今後、スワード市内の中心部に飾られる。

完成した壁画は縦2・4㍍、横9・7㍍で、畑作風景やばんえい競馬など十勝・帯広を連想させる題材を織り込んだ。5日から帯広の美術教諭らが現地を訪れ、作業に取り組んだ。

スワード市内のレストランで14日に行われた落成式で、ジーン・バーダーソン市長や現地の美術関係者ら約120人に壁画が披露された。落成式では、訪問団の一員で帯広三条高校教諭の堀田晃さんがタイトルの「Beautiful nature in 帯広」や絵の内容を説明。

池田団長は「満足できる仕上がりになった。今後、何十年間も見てもらうことができ、両市にとって意義ある友好の表現になった」と話した。

訪問団は既に帰着しており、10月半ばに制作の様子を市民に伝える報告会を予定している。同事業は両市の市民が互いのまちで壁画を描き、友好の証しとする取り組みで、昨年はスワード市民がおびひろ動物園内に制作した。（伊藤亮太）

市提供

原画をトレース

制作風景

合間に書道も体験

スワード市国際姉妹都市締結50周年記念事業　概要

帯広市の国際姉妹都市、米国アラスカ州スワード市との姉妹都市締結50周年を記念して、これまでの交流の軌跡を振り返るとともに、姉妹都市としての絆や市民同士の交流をさらに深めることを目的に、長年スワード市との交流に尽力されてきた帯広市国際親善交流市民の会（以降、「市民の会」）を中心に「スワード市国際姉妹都市締結50周年記念事業実行委員会」を組織し、親善訪問団の相互派遣を実施しました。

派遣　平成30年8月15日（水）～24日（金）

訪問団員

帯広市長	米沢　則寿
帯広市議会議長	大石　清一
帯広市国際親善交流市民の会副会長	沼田　秀実
訪問団員	田中　一郎
訪問団員	池田　美香
訪問団員	夏堀　素子
訪問団員	深谷　かおり
事務局	三品　伸幸
事務局	阿部　恭子
事務局・通訳	レ・イレイン
十勝毎日新聞社編集局政経部記者	本田　龍之介

行程

●8.15(水)	市民出発、スワード市到着
●8.16(木)	ジップライン　体験
	スワード市民との夕食会
●8.17(金)	米沢市長、大石議長出発、スワード市到着
	【市民】シルバーサーモンダービー　参加
●8.18(土)	【市民】エグジット氷河ハイキング
	【市長】スワード市タウンツアー
	ポットラック歓迎会
●8.19(日)	犬ぞりレース　体験
	砂金すくい　体験
	シルバーサーモンダービー閉会式　各賞授与
●8.20(月)	壁画見学ツアー
	シーライフセンター　視察
	アイシクル・シーフード社、博物館　見学
	スワード市民による送別会
●8.21(火)	45周年記念壁画、市民の会寄贈東屋　見学
	アラスカ鉄道　見学
	アラスカ野生動物保護センター　見学
	アンカレジ市へ移動
●8.22(水)～23(木)	移動日
●8.24(金)	帰帯

受入　平成30年10月25日（木）～31日（水）

訪問団員

スワード市長	デヴィッド・スクワイアーズ
スワード市議員	ジェレミー・ホーン
スワード市議員	ケリー・ワイリー＝レーン
スワードアートカウンシル会長	バネッサ・バーヘイ
訪問団員	エリック・スレイター
訪問団員	キャサリン・バイヤーズ
訪問団員	ヘンリー・ウェスト
スワード市教育委員会	リン・ホール
スワード港事務所	アンジェラ・シュワットフェガー
スワード市ＭＩＳマネジャー	マイケル・ミークス

行程

●10.25(木)	来帯、ホストファミリー宅へ
●10.26(金)	とかち広域消防事務組合指令センター　視察
	おびひろ菊まつりスワード市長賞　審査
	道立帯広美術館、帯広百年記念館　見学
	帯広市長、帯広市議会議長　表敬
	歓迎レセプション
●10.27(土)	おびひろ菊まつり　表彰・見学
	トーテムポールワークショップ　参加
●10.28(日)	フードバレーとかちマラソン　出場
	森のハロウィーン仮装コンテスト　審査
●10.29(月)	流鏑馬競技　見学
	明治なるほどファクトリー　視察
	ばんえい十勝バックヤードツアー
	ばんえい十勝レース　協賛・体験
●10.30(火)	ソーセージづくり　体験
	デイキャンプ昼食会兼送別会
	姉妹都市展示　見学
●10.31(水)	帯広の森　散策
	広瀬牧場　見学
	離帯

50周年記念事業・派遣

1 人の輪つなげて

記念品のラッピングもやりますよ

ダービー閉会式前の立食パーティー

2018年（平成30年）9月28日（金曜日）　十勝毎日新聞

人の輪つなげて　帯広・スワード　姉妹都市50年　＜1＞

民間主導　誘客に知恵

日本を出発して28時間。米アラスカ州の玄関口、アンカレッジ国際空港から車で5時間揺られた帯広市の親善訪問団の目の前に、その街はようやく現れた。

日本から28時間

スワード市は大自然に囲まれ、人口約2700人の港町だ。だが、街中にはバーや商店、ホテルが軒を連ねる。一軒のバーに入ると、談笑する観光客の熱気であふれていた。

1968年に帯広市と姉妹都市となった当時、スワード市は漁業が主要産業だった。だが50年の節目を迎えた今、観光が第2の柱になりつつある。デビッド・スカイアーズ市長は「観光の経済効果が街を潤している」と胸を張る。

金融危機で観光客が急減した2009年、市内の宿泊施設の売上高は940万ドル（約10億5000万円）だったが、4年後に1389万ドルと48％増加。その後も堅調だ。

6～8月のハイシーズンには観光客が街の人口を上回ることも珍しくない。ホテルは満室になり、駐車場には100台ものキャンピングカーが並ぶという。

もちろん、アウトドアの聖地であるアラスカに位置するスワードは、地元の商工会議所がスポンサー企業を募って集めたものだ。会議所のシンディ・クラーク代表は「今後はオシャレーズンの冬の観光振興に力を入れる」と意気込む。

郷土芸品店の「ブラウン・アンド・ホーキンズ」を経営するクリフ・クリュッグさん（53）は、近くの商店主とハロウィーンやクリスマスのイベントを企画。イベントの様子を動画にまとめ、フェイスブックで発信している。昨年は冬季に46のイベントを仕掛けた。

市は昨年、30年を見据えた総合計画を策定した。観光を「経済の重要なエンジン」とした上で、「6～8月に観光客の80～90％が集中しているが、イベント効果で冬季の観光も盛り上がってきた」とした。

「小さな街でも住民が課題を共有し、多くの人を巻き込むことで活性化できるはず」と力強く語る郷土工芸品店のクリュッグさん。自宅屋は、ペター・トゥギャザー（一緒にやる方がいい）だ。

帯広市もまた、看板政策の「フードバレーとかち」で基幹産業の農業を軸とした観光振興に取り組んでいる。めぼしい観光資源がない冬の集客が課題となっているところも共通する。

訪問団の一人、田中一郎さん（75）は「イベントの多くをボランティアが担っているのは驚くべきことだ」と話す。地域を元気にする原点を教わった気がした。

（本田龍之介）

◇　◇

8月15～23日、姉妹都市締結50周年を記念して帯広市の親善訪問団（団長・米沢則寿市長、団員10人）が米アラスカ州スワード市を訪れた。これに同行し、同市の取り組みを通じて帯広を活性化するヒントを探った。

シルバーサーモンダービーに参加し、見事に釣り上げた訪問団の深谷かおりさん（右）

氷河を間近で見ようとスワード市を訪れる観光客は多い（市内のイグジット氷河）

訪問団が滞在中の8月11～19日に開催した、釣り上げたサーモンの重量を競う「シルバーサーモンダービー」が代表例だ。最重量のサーモンを釣った参加者には1万ドル（約110万円）の賞金が出るとあって、アラスカでサーモン釣りを楽しむ愛好家がスワード市に集まるようになった。

冬観光が課題

導くは、米東海岸のジョージア州からの参加者もいる。

訪問団の深谷かおりさんは「まさか自分が釣り上げられると思っていなかった。見た目以上に重かった」と興奮気味に話していた。

愛好家の呼び水となる賞金は、地元の商工会議所がスポンサー企業を募って集めたものだ。会議所のシンディ・クラーク代表は「今後はオシャレーズンの冬の観光振興に力を入れる」と意気込む。

郷土芸品店の「ブラウン・アンド・ホーキンズ」を経営するクリフ・クリュッグさん（53）は、近くの商店主とハロウィーンやクリスマスのイベントを企画。イベントの様子を動画にまとめ、フェイスブックで発信している。昨年は冬季に46のイベントを仕掛けた。

市は昨年、30年を見据えた総合計画を策定した。観光を「経済の重要なエンジン」とした上で、「6～8月に観光客の80～90％が集中しているが、イベント効果で冬季の観光も盛り上がってきた」とした。

「小さな街でも住民が課題を共有し、多くの人を巻き込むことで活性化できるはず」

2018年(平成30年)9月29日(土曜日) 十勝毎日新聞

人の輪つなげて 帯広×スワード 姉妹都市50年 <2>

住民参画 まちに活気

米アラスカ州南部にあるスワード市内を歩くと、あちこちで巨大な壁画が目に留まる。漁の様子や住民に人気の山登りレース、色鮮やかなくちばしを持つ海鳥「ツノメドリ」などが題材だ。訪問団の池田美香さん(57)は「絵そのものが大きいのに、デザインも凝っているところがすごい」と目を見張った。

巨大壁画20カ所

壁画制作プロジェクトは1999年に開始。現在20カ所以上に設置され、同市は「壁画の街」としても知名度が高まっている。観光客が歩きながら壁画を楽しめるようパンフレットを作製し、商工会議所などで無料配布する。

だが、この壁画プロジェクトは観光客の呼び込だけを目的としたものではない。スワード市出身の夫を持ち、十勝とスワードを行き来する生活を送るキャンベル紀子さん(61)は「市内の至る所にある壁画は、住民が積極的にコミュニティーに参加していることの象徴」と語る。

というのも、壁画制作は画家だけでなく市民が協力して仕上げてきたからだ。スワード市在住でこれまで3作品を手掛けた画家ドット・バーダーソンさんは「壁画制作の仕事はできるだけ細分化し、より多くの市民が参加できるようにした。そうすることで市民にとって愛着のある作品になる」と指摘する。

わずか2700人の街では住民が一丸で取り組まないと大きな力になりにくい。「ペーター・トウギザー(一緒にやる方がいい)」の意識が地域の隅々に浸透している。

そうした気風は、訪問団の歓迎パーティーでも見て取れた。主催したアビッド・スカイアーズ市長ら50人の市民がそれぞれ手料理を持ち寄り、訪問団に振る舞った。訪問団も現地で取れたサーモンを使ってイクラの軍艦巻きやちゃんちゃん焼きを作った。

またスカイアーズ市長は、格式張った歓迎のあいさつを早々に切り上げ、訪問団を会話の輪に招き入れた。会場近くの図書館に来た市民も飛び入りで参加。米沢則寿帯広市長(62)は「気軽で壁をつくらない交流は見習うべき点があった」と振り返る。

増え続ける移住

新聞も地域の一体感を醸成している。毎週水曜日発行の地元紙「スワード・シャーナル」は、スーパーなどで無料配布される重要な情報源。地域のイベントはもちろん、学校で提供される給食のメニュー表まで載っている。

スワード市では2012年以降、観光などをきっかけに移り住む人が増えている。一方で転出者は少なく、市の人口は減ることなく踏みとどまっている。アラスカ州の予測によると、今後は人口がじわじわと増加する見込みだ。強固なコミュニティーが一体感を生み、それが住みやすさとなっている面がある。

「観光は街を潤すが、住民が積極的に参加するコミュニティーがなければ、いずれ衰退するだろう」。スカイアーズ市長の言葉は帯広にも当てはまる。

(本田龍之介)

図書館の壁画

壁一面に描かれた壁画のスケールに圧倒された訪問団の一行

街の至るところに壁画が

参加者が手料理を持ち寄った歓迎パーティー。訪問団の料理も人気だった

法被を市長にプレゼント

壁画協会 ヘドキー元会長と

2018年(平成30年)9月30日(日曜日) 十勝毎日新聞

人の輪つなげて 帯広×スワード 姉妹都市50年 <3>

温めた絆 次の世代へ

「私と帯広市との接点がなかったら、帯広市とスワード市も姉妹都市になっていなかったかもしれない」

1967年に両市の橋渡し役となった大園雅彦さん(千葉県在住、87)はこう振り返る。大園さんは当時、水産会社に勤務し、64年のアラスカ地震で被害を受けた水産加工業の再建を支援するため、スワード市に出張した。

日本からの出張者を歓迎するパーティーの席上、市関係者が「帯広を知っている人はいますか」と呼び掛けた。帯広市内の高校を卒業した大園さんが「第二の故郷です」と応じると、その場で姉妹都市締結を要望する文書を手渡された。大園さんは驚きつつも帯広市にその文書を送り、両市の交流がスタートした。

❖帯広とスワードの交流経過

1967	大園さん、スワード市を訪問し、市の歓迎パーティーで国際姉妹都市締結関連文書を渡される
1968	国際姉妹都市締結
1972	帯広市開基90年記念式典出席のためスワード市長ら一行9人が来帯
1973	高校生相互派遣事業開始
1982	帯広市開基100年記念式典出席のためスワード市長、市民、スクールバンド一行53人が来帯
1993	姉妹提携25周年記念親善訪問団一行46人がスワードへ、あずまやを贈呈
2003	スワード市開基100年親善訪問団一行31人がスワードへ
2013	姉妹都市締結45周年事業 壁画制作のためスワード市長ら7人が来帯
2014	姉妹都市締結45周年事業 壁画制作のため9人がスワードへ
2018	姉妹都市締結50周年記念訪問団10人がスワードへ

偶然の橋渡し

当時のスワード市は地震被害から復興するため日本企業の進出を求めていた。ただ、「なぜスワードが帯広に興味を持っていたのか、いまだに謎」と大園さんは笑う。

きっかけは偶然だったが、半世紀を経た今でも両市民が行き来して国際交流を深める先があることは、帯広市の財産だ。自治体国際化協会(東京)によると、約120ある道内自治体の国際姉妹・友好都市のうち、スワード市は9番目に長い歴史がある。

竹中配管(帯広市)代表の山田幸恵さん(50)は85年、高校生相互派遣事業に参加してスワード市を初訪問。大自然と人々の温かさに触れ、高校卒業後、スワード市に1年間留学した。「英語はまったく話せなかったが、スワードの風土が肌に合った」と振り返る。その後も、93年の親善訪問団に参加したり、現地の友人の結婚式に出席したりして交流を継続している。

スワード市のドーリー・ハリングスワースさん(62)も高校生相互派遣で帯広を訪問した。「大きな街と二面に広がる牧場が印象的だった」と懐かしむ。それ以来、帯広からの訪問者を快く受け入れ、お互いの街について話をするのが楽しみだ。これまでに、両市の約300人が高校生相互派遣に参加してきた。

街づくりや経済も

一方、次の50年に向けた課題もある。両市の交流を支え続けてきた市民の多くが高齢化し、次の世代にバトンを託す時期に来ているのだ。

十勝とスワードを行き来する生活を送るキャンベル紀子さん(61)は「SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)で簡単に連絡を取れる時代になり、若い人ならではの交流の形ができるのではないか」と期待する。

今回の訪問団に加わった田中一郎さん(75)は「ボランティアが地域を支える姿を見て、自分も帯広で実践してみたくなった」と話した上で、「お互いに学び合って、豊かな街づくりに生かせれば」と交流拡大に期待を寄せる。

スワード市も同じ意向だ。アビッド・スカイアーズ市長は訪問団の歓迎パーティー終了後、「市民同士の交流が50年も続いたのは驚くべきことだ。今後、ビジネスの関係を含めて交流できれば、絆はもっと深まる」と話した。

姉妹都市には明確な定義がなく、交流の目的も教育や文化・スポーツ、経済など自治体によってさまざまだ。両市の意向をすり合わせ、関係をどう深化させるかが問われる。

(おわり、本田龍之介)

上スカイアーズ市長(右)は訪問団の田中一郎さんが贈った法被をその場で着て、感謝の気持ちを表した

下姉妹都市のきっかけをつくった大園雅彦さんが1967年に訪れた際の写真。後ろの建物は今回の訪問団も宿泊したホテル(大園さん提供)

45周年壁画前でお手を拝借、ヨォ〜ッ!

25周年に市民の会から寄贈されたあずまや

上手に折れました

送別会にて

一緒に歌う?

十勝石のキーホルダー

素敵な歌声でした

「Kampai」を全員で

十勝石のキーホルダー、どうぞ

50周年記念事業・派遣前

十勝石拾い

平成30年6月16日、50周年記念品の材料とする十勝石を、音更川の河原で採取しました※。

これまでスワード市との交流に尽力されてきたスワード市出身のキャンベル氏と紀子夫人をはじめ、50周年記念訪問団、平成29年度高校生相互派遣参加者の児玉さん、草薙さん、鈴木さん、村上さん、平成30年度高校生相互派遣参加者の保刈さん、加藤さん、小林さんにお集まりいただき、採集した118個の十勝石は、心の込もった記念品となりました。

はじめに、山原敏朗帯広百年記念館館長から、十勝石の特徴について説明をいただき、採取中もご指導をいただきました。最初は山原館長に確認しながらだった参加者も、時間が経つにつれ十勝石を見分けられるようになり、あちこちから「見つけたー!」と歓声が上がりました。　※帯広河川事務所に報告の上採取しています。

結団式

平成30年7月9日、スワード市国際姉妹都市締結50周年記念訪問団の結団式を行いました。

団長の米沢則寿帯広市長から、この訪問により両市の絆がますます深まるようにとの挨拶があり、訪問団員は、スワード市訪問に向けて目的を新たにすることができました。

料理練習会・試食交流会

平成30年7月28日、郷土料理練習会を開催しました。スワード市で開催される歓迎会に、スワード市同様、北海道・帯広に根付く鮭の郷土料理を提供することとなり、事前の役割分担、手順の確認を行いました。
講師には、帯広地方卸売市場買受人組合副組合長、村下栄蔵氏をお招きし、ちゃんちゃん焼き、鮭フライ、石狩汁、イクラの塩漬け・醤油漬けの調理方法を教わりました。

調理後の試食では、長年スワード市との交流に尽力されている「市民の会」の夏堀副会長、馬場監事、村中理事、中山理事、宗岡会員にもお越しいただき、過去にスワード市を訪問された馬場監事、宗岡会員からは「貴重な経験。積極的に挑戦、会話し、後悔のないよう楽しんでほしい。」とのお話をいただき、良い交流となりました。

50周年記念事業・派遣

歓迎会

平成30年8月18日、スワード市図書館の１階にて、スクワイアーズ市長ご夫妻、在アンカレジ領事事務所西沢領事をはじめとする50名ほどの皆様にお集まりいただき、スワード市主催の歓迎会が開催されました。

スクワイアーズ市長から歓迎挨拶をいただき、米沢市長、大石議長、沼田市民の会副会長からも、長年交流に携わってきた方々への感謝の気持ちが述べられました。

歓迎会は、生バンドの演奏の中、参加者が料理を持ち寄るポットラック形式で賑やかに進められ、大きなカニ、サーモンなどスワード特産の魚介料理、50周年記念の大きなケーキのほか、前日のシルバーサーモンダービーに同行いただいたスワード市職員のマイケル・ミークス氏が釣り上げた全長1.5mはあろうかという巨大なオヒョウのソテーなどが提供されました。シルバーサーモンダービーで釣った鮭で帯広市訪問団が作った北海道・十勝の郷土料理も好評で、特にイクラと鮭の手毬寿司は開始後あっという間になくなってしまうほどでした。

記念品交換

歓迎会では、両都市から50周年の記念品が贈られました。

スワード市からは、市内のアーティストがレザレクション湾の鉱物から制作したアラスカらしいクジラのアートピースを、帯広市からは、帯広市のグラスアーティスト寺島久美子氏によるステンドグラスの時計を贈りました。

記念品に使用した十勝石は、帯広市の「市の木」である白樺の幹の枝痕（黒い節）を表しています。

半世紀にわたる交流とこれからも共に歩む様子を、スワード市時刻、帯広市時刻をそれぞれ示した時計を並べることで表現し、デザインの中心である２本の白樺の木は、スワード市と帯広市になぞらえ、両市の関係がより強い「絆（Kizuna）」へと向かうよう願いを込めて制作しました。

絆の文字は、2004年に娘さん（18頁に掲載）をスワード市へ派遣された書道家、八重柏冬雷先生に揮毫いただきました。

第63回シルバーサーモンダービー

スワード商工会議所主催、アラスカ州最大規模の鮭釣り大会で毎年6,000人以上が参加する「シルバーサーモンダービー」に、訪問団も参加させていただきました。大会開催中のスワード市は、港近くに大きなキャンピングカーがずらりと並び、500人以上は乗れるかという中型程度の客船も2、3停泊するなど、街は活気づいていました。

前日に受付を済ませ、当日同行の船員から注意事項を聞いて早朝7時にいざ出港、気合も十分です。

出港から1時間以上沖合に出たポイントで釣り方を教わり、早速釣りを開始。餌は鮭のアラ、大きなタラの切身などで、これから釣れる獲物の大きさを想像させます。

最初のポイントでは釣れませんでしたが、2か所目では体長1mほどもあるカジカや70cmほどのメバルなどが釣れ、3か所目のポイントでは念願のシルバーサーモンを釣ることができました。

この大会は多くのボランティアの活躍で成り立っており、売り上げは鮭の研究所や孵化場に寄付されます。

美しい朝焼けの港
いざ出発
のちのオヒョウソテー
あれが刑務所ね
黄昏の副会長
船酔いです・・・
ついにきました
念願のシルバーサーモン
本日の釣果　すごいでしょ?

シルバーサーモンダービー閉会式

残念ながら訪問団の入賞は叶いませんでしたが、50周年記念として特別に50位の方に帯広市長賞を、子どもの優勝者に帯広市議会議長賞を贈呈しました。また、優勝者には、市民の会が42年間提供してきた「市民の会会長賞」を、会長代理の沼田副会長から直接手渡すことができました。

市民の会会長賞
帯広市長賞
帯広市議会議長賞

市内視察・体験等

滞在中は、スワード市の雄大な自然、歴史、盛んな水産業、観光業について理解を深めることができました。

夏でも見られるエグジット氷河へ向かう道路やハイキングの道中には、「1917」「1926」など、その年にはその位置まで氷河があったことを意味する立札が配置され、年々後退していることを実感しました。

アンカレジ―ノーム間で開催される犬ぞりレースの疑似体験では、1800～1900年代に、不凍港であるスワード港がアラスカの玄関口となっていたことから、スワード―ノームを結ぶ3,701kmの「アイディタロッド（先住民の言葉で“遠い”）・トレイル」と呼ばれる犬ぞりの道が、主に鉱業で利用されていたという歴史を知ることができました。

また、砂金すくい体験では、1867年にアメリカがロシアからアラスカを買い取り、1898年にアラスカで金が発見されたことがきっかけで、アラスカ州への移住者が増加し、街が栄えていった歴史を学びました。

このほか、アラスカ州内唯一の海洋哺乳動物の保護施設であるシーライフセンターの視察や、スワード市特産である魚介類の缶詰加工や養殖、研究を行うアイシクル・シーフード社の工場を視察し、スワード市への理解を深めました。

2018!
氷河までの道のりは長い
砂金あった!
かつてのレース出発点は
スワード市に
シーライフセンター視察
実際のレース
アイシクル・シーフード社
犬ぞり体験
日本へも輸出される

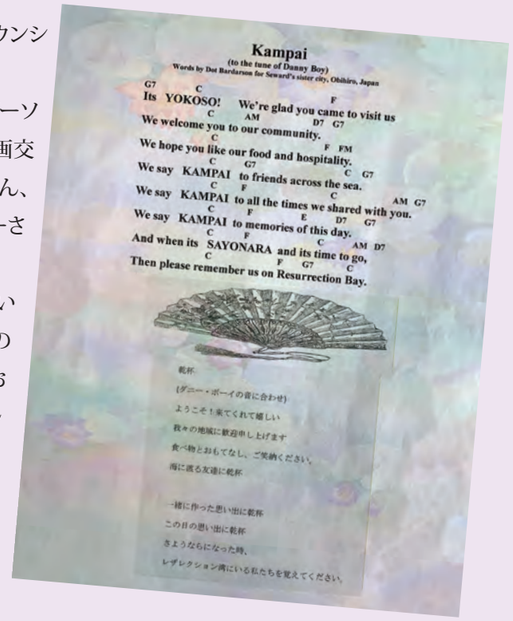
送別会

送別会は市民主催で、10月に帯広に来られたスワードアートカウンシル会長のバネッサ・バーヘイさんのお宅にご招待いただきました。

初の高校生相互派遣事業の初回参加者だったドーリー・バーダーソンさんや、その母で自身も帯広に来られた経験があり、45周年壁画交換事業ではアーティストとしてご活躍されたドット・バーダーソンさん、元壁画協会会長で帯広の壁画も制作されたジェニファー・ヘドキーさん、ホストファミリーなど、多くの方々にお集まりいただきました。

大きなピザをごちそうになりながら、鶴の折り方を教えたり、思い出話や滞在中の話題に花を咲かせたりと終始なごやかな雰囲気の中、交流を深めることができました。また、訪問団から、滞在中のお礼にと、50周年記念品同様、関係者が採取した十勝石のキーホルダーをお集まりいただいた全員にプレゼントしました。

最後はドットさんのギターに合わせて、全員で「ダニーボーイ」のメロディーにのせた歓迎の替え歌「Kampai」を歌い、スワード市の皆さんからのリクエストに応えた大石議長が、日本の伝統的な歌曲「さくらさくら」をご披露くださいました。


Kampai
(to the tune of Danny Boy)
Words by Dot Bardarson for Seward's sister city, Obihiro, Japan

G7 C F
Its YOKOSO! We're glad you came to visit us
C AM D7 G7
We welcome you to our community.
C F FM
We hope you like our food and hospitality.
C G7 C G7
We say KAMPAI to friends across the sea.
C F C AM G7
We say KAMPAI to all the times we shared with you.
C F E D7 G7
We say KAMPAI to memories of this day.
C F C AM D7
And when its SAYONARA and its time to go,
C F G7 C
Then please remember us on Resurrection Bay.

乾杯
(ダニー・ボーイの音に合わせ)
ようこそ！来てくれて嬉しい
我々の地域に歓迎申し上げます
食べ物とおもてなし、ご堪能ください。
海に囲る友達に乾杯

一緒に作った思い出に乾杯
この日の思い出に乾杯
さようならになった時、
レザレクション湾にいる私たちを覚えてください。

帯広市国際親善交流市民の会　副会長 沼田　秀実 さん　Hidemi Numata

50周年訪問団として、また帯広市国際親善交流市民の会副会長としてスワード市を訪問し、教育、文化、産業、経済や地域における親善交流を目的として異文化を体験し、一般家庭の生活を知ることができたことは、大変有意義な経験だった。日本を発って約28時間後に現れたスワード市は、日本から遅れて17時間の時差があり、白夜で、初めての体験に感動した。

歓迎交流会では、参加者が手料理を持ち寄り、私たち訪問団も現地調達した食材で作ったちゃんちゃん焼きや寿司等を持ち寄り、気軽な飛び入り参加交流には見習う事もあった。

アラスカ最大規模の釣り大会シルバーサーモンダービーに参加し、閉会式では、当会が1976年から優勝者に贈呈している会長賞を、この記念の年に直接授与する名誉ある役目を果たし、大変光栄だった。

氷河ハイキングでは、道程にそこまで氷河が在ったことを示す年代の掲示があり、ここ数年はかなり速く氷河が後退していると感じた。1993年に当会から贈呈した東屋や、20ヵ所以上設置された巨大な壁画が、奇麗に保護されていることに感動した。住民が課題を共通認識として捉え、観光客の誘致も強固な市民コミュニティで支えるという意識が隅々まで浸透していること、自然資源をあらゆる分野に活かすことで、街を住みやすく、活性化させていると思った。帯広市が推進する「フードバレーとかち」も、少子高齢化といった課題も、地域コミュニティに解決の手がかりがある。今後も姉妹都市としての交流深化を望む。

挨拶の手直し…

いざ本番

市民有志の歓迎食事会

池田　美香 さん　Mika Ikeda

スワード市親善訪問団の一員として参加させて頂きまして大変ありがとうございました。
希望しておりましたホームスティーは実現しませんでしたが団員の方々とのシェアハウスも貴重な体験でとても楽しい時間を過せました。

スワード市に着きまず、驚いた事は白夜で夜の9時頃まで薄明だった事です。初体験でしたので不思議な感じでした。スワード市内はとても小さな街でしたがあちこちに大きな壁画がたくさんあり壁画の管理も行き届いており街の中がきれいに片付いておりました。
歓迎レセプションでは生バンドの演奏もあり驚いた事は自由な時間で始まり、いつの間にか終っていると言うアメリカンな感じを初体験し最後には歓迎される側の私達も片付けを手伝うというアットホームなものでした。

スワード市で初めて体験したジップラインは、広い森や池の上を風を受けながら鳥の様に飛んだ感じが心地良かったです。

天気に恵まれての船に乗ってのシルバーサーモン釣りもダイナミックで、大きな魚が釣れたのを間近で見られたりもしましたが、私自身は釣る事が出来ず、とても残念でした。私も大きな魚を釣ってみたかったですね。

他にも氷河ハイキング、シーライフセンター水族館バックヤード見学、缶詰工場見学、犬ぞり体験、野生動物保護センターでヘラジカを見られてとても楽しかったです。

最後の夜には、ホームパーティーもしていただき、大きなピザを食べながら折り紙の鶴の折り方を教えたりして、少しだけ交流する事が出来ました。全体的に思っていたより、天気が悪く寒かったですが事故もなく(ちょっとありましたが)皆が無事帰国する事が出来ました。
市の職員の方々や団員の方々には大変お世話になりました。通訳もして頂きありがとうございました。

犬ぞり映画の主演俳優と

ポテト、多くない？

夏堀　素子 さん　Motoko Natsubori

いつの頃からか定かではありませんが、私の父はスワード市に派遣する高校生を選考する面接に携わっていました。ある時、志望する高校生の面接をしながら「自分が知らないところに高校生を派遣するのはいかがなものか」と思ったそうです。その頃「カナダ・アラスカ訪問視察団」の話があり、父は仕事で参加できない自分の代わりに母を団員として参加させることにしました。それが1976年、私が初めてスワード市という帯広の姉妹都市の存在を知った年でした。その後、母は節目の年ごとに訪問団の一員としてスワード市を計５回訪れることになります。この国際姉妹都市締結50周年という節目の年には、ぜひにでも母にスワード市を訪れてもらいたかったのですが、さまざまな事情でそれが叶わず、個人的にも、仕事でも、何かとスワード市に関わってきた私が母の代わりに参加したいと思いました。

４年前に帯広市国際親善交流市民の会会員として訪問した際に自分のミッションとしていたのは、帯広市のアーティストらで制作された壁画の落成式に出席すること、また過去に寄贈した東屋がどのようになっているかを見ることでした。そして、今回の訪問で私がミッションとしていたのは、その壁画の現状を見ることでした。私がホームステイさせていただいたのは、地元の著名なアーティストであるドット・バーダーソンさんのお宅でした。いろいろな話をしながら、彼女のアート作品、家族の写真、帯広市との交流の写真を見せていただきました。また、東屋について、冬の夜にブランケットにくるまって温かいお茶を飲みながらお友達とおしゃべりをして楽しむという話をしてくださり、あの東屋が25年経った今でもそのように市民に使われていることを知りうれしく思いました。

最終日の壁画ツアーでそれぞれの作品にまつわる話を聞きながら、スワード市がアラスカ州の『壁画都市』であるなら、帯広市は北海道の『壁画都市』になれないものだろうかと考えました。2013年と2014年に両市で行ったような壁画交換事業を何年かに一度ででも行うことができれば、壁画が帯広市民の目に触れる機会が増え、スワード市についてもっと知ってもらい、またより多くの人々が姉妹都市交流に関わることができるよい機会になるのではないかと思いました。

ドット・バーダーソンさん　Dot Bardarson

私は夏堀素子さんのホストファミリーとなり、とても楽しい時間を過ごしました。なぜなら、彼女の英語はとても流暢で、たくさん話し合ったり、笑ったりできたからです。(もちろん、もしも彼女が英語を話さなかったとしても、私たちはたくさん笑い合えたと思います。言い表すことのできない、愛、尊敬、表情、ジェスチャーといった国境を超えた言語があり、それは必然的な心のつながりを生むこと、そこにはたくさんの笑顔があることに気がつきました。)

素子さんはお礼のメールをくださいました。

「私は、それぞれの壁画に対するあなたの説明に、とても感動しました。そして、スワード市がアラスカにおける壁画の中心地ならば、帯広市が北海道における壁画の中心地となれたらよいのにと思いました。いつか、帯広の壁画団体を組織できることを夢見ています。」

50周年記念事業・手記

深谷　かおり さん　Kaori Fukaya

私は今回の訪問団に参加するまで、帯広市の国際姉妹都市がスワード市であることを知りませんでした。50年という長い年月の間に交流があったことにも驚きつつ、どんな風景なのか?どんな街なのか?どんな人たちが住んでいるのか?と興味を惹かれました。また仕事の関係上、経済がどのように成り立っているのか?どんな食文化なのか?を直接見たいと強く感じていました。

実際にスワード市へ行ってみると、夏でも肌寒く、夜が明るいことにとても驚きました。一日が非常に長く感じられ、時間の感覚が狂ってしまいました。山と海に囲まれた風景が広がっており、自然の豊かさを肌で直接感じました。街並みは帯広市と似ている印象があり、碁盤の目のように区切られた通りがそう思わせているようでした。スワード市の市民は身長が高いためか、日本人の中でも身長が高い自分自身がとても小さく感じました。人柄はとても優しく、いつも笑顔で、移民の方が多いためか色んな価値観を受け入れてくれるような印象でした。帯広市も四国などからの開拓者が多く、色んな発想や考え方を持っている所は似ていると感じました。

シルバーサーモンダービーに参加した際に、スワード市の経済が漁業中心であることが一目で分かりました。船が港に立ち並び、大型客船が優雅に浮かび、キャンピングカーが道路に並んでいる姿はとても印象的でした。船をチャーターして沖まで行く間に、海と山の間から朝日が覗いたり、雲に虹がかかっていたり、真っ青な海が一面に広がっていたりと様々な表情の自然を楽しむことができました。帯広市は海に面していないため、決して見ることのできない風景でした。そして、シルバーサーモンを釣り上げた感動は今でも忘れることができません。とにかく重くてリールが巻き上げられず、船長に手伝ってもらいながら引き上げました。想像以上に大きくて驚き、港に戻ってから選別場で捌かれる姿は滅多に見られない光景でした。隣で12～13歳の男の子が父親に指導されながら(注意されながら)魚を捌いている姿を見て、こうやって技術や知識が継承されていくのだと感じました。これは漁業であろうと農業であろうと、どこであろうと人から人へ伝えられる変わらないものだと感じました。一方で、スワード市の自然はとても豊かではあるけれど、気候変動による氷河の後退や、野生動物・海洋生物の減少が問題になっている印象を受けました。また、真冬に市民はどのような暮らしをしているのか?と疑問に感じました。帯広市も雨が少なく十勝晴れという言葉があるくらい晴天率は高いが、冬になるとマイナス30℃近くまで下がることがあり、夕方4時頃には日没となってしまいます。大雪によって吹雪いた時にはホワイトアウトになったこともあります。スワード市や帯広市の情報を発信する上では、綺麗・豊かさだけではなく、自然の厳しさ・暮らしの厳しさも含めて本当の意味で知ってもらう必要があると感じました。

今後の交流の提案としては、高校生対象の派遣プログラムがあるように、大学生や専門学校生を対象にしたプログラムを組んでみたらどうかと考えました。帯広畜産大学には畜産科学学科や獣医学科、別科には農家の後継者がおり、帯広コア専門学校には歯科衛生士科や情報科、帯広高等看護学院には看護学科があります。専門性が異なる人たちを一緒に派遣することによって、様々な視点や発想で市民との交流ができるのではないかと考えました。というのも、今回参加した際に帯広市民同士、年代も異なれば職業も異なるため、たくさん面白い話しが出来たからです。また、市長や議長と直接話す機会もいただき、とても親しみやすい方々だと知ることが出来ました。冗談も交えてお話しできるのは、こういった機会しかないなと感じました。帯広市役所の職員の方々とも交流することができ、どういった人が市役所で働いているのかを知ることができました。普段は申請書のやり取りだけだったりするため、色んなお話しが出来るのは面白いなと感じました。帯広市民同士で交流することは、普段住み慣れている帯広市の魅力を別の視点で知ることができ、スワード市との繋がりを発展させるためにも重要だと感じました。私は自分が体験・印象に残ったことを他の帯広市民に伝えていきたいと思います。スワード市へ行った話は話題にもなりますし、周知させていくためには良い手段だと思います。十勝毎日新聞に掲載して頂いたおかげで、たくさんの方に載っていたねと声をかけられるようになりました。自分のように周りの人に口コミを広げる人が増えることを願っています。

砂金の他にも気になる鉱物がある

マイケルさん、ジョージさん、アダムさんと

ヘラジカ大きいです

50周年記念事業・手記

1　田中 一郎 さん　Ichiro Tanaka

1.スワード市の印象

1）人口

日本では限界集落や消滅町村等の人口減少に対して暗いイメージを持って語られることがほとんどであるが、スワードは陸別町よりも少し大きな町ではあるが、人口減少がやっと止まった状況であり人口問題に対して暗いイメージはない。瞬間的には人口以上の船客が訪問し平たく言えば、金を落としてゆく。一時的にしろ、2倍や3倍の人口に一瞬でもなる。あるいは夏場の観光客や釣り人は大切なお客として取り扱っており、べたべたした、えせおもてなしではなく一定の距離を置いて客の自由度が高いおもてなしが素晴らしい。これがスワード市にもう一度いや毎年来てみたいと思わせる対応が素晴らしい。これが一時的にしろ訪問客があり経済を活性化するので、市の安定的な人口維持につながっている。

2）ボランティア

人口が少ないことは税収や行政で普段我々が享受しているサービスは当然ないに等しいと思われる。彼らはこれをカバーしているのがボランティア活動であるという。それがないとすべてがストップしてしまうそうだ。自分たちが必要とする内容は自らが率先して行い、結果をみんなでシェアする。そうすることによって、受動の行政システムから自立・自主的な行政へと変換ができる。これがスワード市。

今回の訪問においても多くのボランティアが参加し、それぞれの専門あるいは活動している分野で情報や接待を提供していただいたことに対して心からお礼を申し上げたい。また、その旨をスワード市サイドに伝えて欲しい。帯広市のボランティア活動は今はよくわかっていないが、これから機会があれば参加する意識を持って参加してみたい。

残念なことはボランティアシステム等についてのお聞きする機会がなかったことである。

3）清潔で美しい街

ゴミがない、落書きがない、放置された物品がない、野良の猫や犬もいない。家々毎に芝はきれいに刈り込まれており、落ち着いた町並みを提供している。清潔感あふれる街が人々に安心を与えている。

残念なことはサケの内臓や骨が海の捨てられていたこと。捨てられている下を見ると船台?のような装置があり、これで骨や内臓を受けてどこかに引いて行ってそこで魚のえさにするのか?

4）市の職員

詳細には不明であるが、車を献身的に運転をしていただいた２名の女性は市職員?朝早くから遅くまで我々の接待に動き回ることに敬服する。厚くお礼を申し上げたい。

5）壁画

街角に多くの壁画が存在する街の在り方は清浄な空気や落ち着いた景色をマッチしており、芸術心がないものにとっても壁画のすばらしさが理解できる。決して派手ではないが、そこが町の佇まいとマッチして、スワードらしい景観を醸し出している。帯広の壁画は存在感がある壁画であり、後世に伝えてゆける。作者の思いが十分に表現されており、作者が伝えたい心がスワード市との友好や親善につながっていると判断している。

6）東屋

友好の証としての東屋は公園の中で少し寂しい感じはするが、十分に役割を果たしている。

残念なことはあまり利用されている感じがしなかったこと。東屋の中にテーブルを置いて食事などに利用できるようにすることはいかが?利用方法の説明も必要かも。釧路市は灯篭を立てているが、何かちぐはぐの感じが否めない。両市が協力して、海や山々を借景にした日本庭園を公園に長期視野に立って創出する計画も必要では。今のままでは理解も利用も進まないかもしれない。

2.スワード市の理解促進

事前に資料等を調べたつもりであるが、まだまだ不足しているところである。日本あるいは十勝の町の人口減少が進み、特に地方での人口減少が顕著であることが共通認識である。3,000人弱のスワード市が市として経営ができることをもっともっと学ぶべきであり、それを吸収し今から人口減少に備える知恵やシステムを学ぶべきである。残念なことはスワード市の概要や行政の内容等について市当局からの説明や意見交換会があればもっと充実したかもしれない。ここは本田記者が調査していると思うので、彼に期待したい。逆に言えば、スワード市の方が帯広市を訪問した折は帯広市の概要等を説明したほうが良い（すでに実施しているかもしれないが）。観光やイベントだけの実施では有効や親善は促進しない。

文化やそこの住む人たちの息遣いが伝わってくる生きた情報を共有することも必要。

3.親善友好パーティ

Potluckは初めて経験するパーティ形式であり、素晴らしいパーティに参加できたことはうれしかった。各家庭から自分の手つくりの料理を持ち寄っていただくパーティは日本でももっと実施できれば、新たな触れ合いや友好の芽が出てくるかも。

おいしかったのはエディブルフラワーがデコレイトされたサラダ。ドレッシングも自家製?塩味が少し強かったが、アラスカクラブ?もおいしかった。日本ではあれだけの大きさのカニはもう見かけなくなった。

参加メンバーで料理を作ったことは参加メンバーをつなげる良い手段であった。ほとんどそれぞれの参加者のバックグランドを知らない中での作業であり、指示されるのではなくそれぞれが自主的に 自ら進んで役割を果たしたことはこれからの参加メンバーのきずなが深まることになる。

残念なことはパーティがいつの間にか流れ解散になっていたこと。日本式に言えば、クロージングセレモニーがあると思っていた。これも郷に入れば郷に従えか。

逆に言えば、日本ではきちんとクロージングセレモニーを行うことは文化として紹介できる。今度スワード市の方が来たときは日本式のクロージングセレモニーを行いましょう。

4.ホームステイ（HS）

この年令でのHSは少し心配していたが、素晴らしい家庭を紹介していただいたことに感謝している。

HS先は夫婦別姓であり、それぞれの個を尊重して生活し、協力や役割分担を行っていた。旦那は大工が本職らしい。今は78才であり、本格的な大工の仕事はしていないようであったが、多くの趣味?仕事?があり日々忙しい。物静かな職人。

2haの敷地に農場部門としてヒツジ6頭、七面鳥20羽ほど、鶏15羽程度、家庭菜園の野菜作り、猟師としてカリブーやエルクにクマなどの大物ハンター。自分で建築した母屋での民宿事業?や、漁師もするという。日本では違法になるが、自分の敷地に流れている小川でフックで釣り（ひっかけ）、イクラは孫娘（6歳）が大好きであり、彼女のためにサケを採る。

彼はMount Marathon Meetingに参加している。海抜ほぼ0mから1,080mまで一気に駆け上がる過酷なレース。往復40分ぐらいで登って駆け下りてくるという。すごい。鉄人。市内の看板にも彼の雄姿が紹介されていた。年間に何回もマラソンに参加する。奥様がサポートをし撮影係。ピンクのパンツは彼のシンボルカラーである。

奥様はアラスカ大学のスワード市海洋生物研究所の研究員でまだ現役。旦那は少し耳が遠いようであったので、また自分の英語の発音が彼らと違っていたためか、奥様が通訳して会話が進んだ時もあった。彼女は私が理解できる単語を並べ、子供を諭すように丁寧に話してくれた。

彼ら夫婦は読書家。時間があればともに読書。食事中はSUDOKU。お互いに協力して問題を解くことで心の通じ合いができるようだ。孫からどちらが勝ったかとの質問があるが、どちらも勝って、負けはないと言っているそうだ。

The Salmon Derby（SD）

一番の大物を釣り上げたMikeと

暖房は薪ストーブ、自家発電（10時から6時まで消灯）、トイレは昔懐かしいぼっとん便所（学生時代は寮にいたので、糞柱倒れて春を知る）。これは高校生には少しつらいかも。朝は3回ともいろいろな味のパンケーキ。おいしかった。しかし、質素。旦那が食事を作り、奥様がかたづける役割分担がはっきりしているという。夜は帰るとすぐにビールはどうかを誘われた。ビールも自家製。黒ビールがおいしかった。すでに夫婦で食事をしながらビールを飲んでSUDOKU。食事の時はランプ。私にはSUDOKUの字がほとんど見えない。これは紙に書いてあるのではなく、きっと旦那が創出した碁盤の目の台（日本式に言えば、将棋台）に1から9までの数字が書かれた丸い駒を並べて問題を解く。問題は新聞の記事を利用。これであれば、何回でも繰り返して問題を解くことができ、紙を無駄にしない。HSの時は少し問題がむつかしくてこずっているようであった。自分は女房とこんなことは絶対できない。うらやましい！

5.The Salmon Derby（SD）

すごく楽しかった。静かな海に適度な気温。釣りの条件としてはこれ以上望めない好条件。あとは運否技術が大切。

最初フックを見て驚いた。自分が使用している大きな釣り針とはかけ離れた大きさのフック。餌も頭、背骨そしてなんとイクラもついている。少なくとも十勝ではありえない大きさ。これで釣れた魚の大きさから、このエサでないと釣れないことが分かった。10kg以上の大物。タラの類?と赤魚の類?が釣れていた。自分にはヒットなし。釣り場まで約4時間かけたのに、坊主はないだろう。場所を変えて餌を変えて、ここでオヒョウが8kgぐらいのを3尾ゲット。帰りがけにサケに挑戦。しかし、女性が釣った3尾のみ。中型であり、SDで優勝は無理。

同行のMikeは84kg超のオヒョウを釣り上げた。彼は必死になって釣り上げた。彼の満面の笑み。彼にとっても初めての経験。Congratulations!

ここで日米の海釣り道具の相違を。日本では深さや錘、魚の大きさによるが、ほとんど電動リールを使用。彼らは電動を使用しないで手で巻く。オヒョウを釣ったときも自分はふらふらしながら巻いたが、船長は一気に安々と巻き上げてくれた。パワーの差を見せつけられた。もちろん手で巻くので、竿掛けホルダーも使用しない。日本は針を欲張りに8本や時によっては10本つけるが、彼らは1本のみ。これはSDのルールかもしれないが。

残念なことはせっかくSDに参加しているのだから、サケをもっと釣れることができたらなあ。しかし、大物が釣れたので良しとしよう。

釣り人は魚をさばかないのはさばき方を知らないから?さばきは専門職?

来年チャンスがあればもう一度チャレンジしてみたい。彼らにおいしいイクラの食文化を広めて、廃棄物の削減に協力したい！大げさだよね。

6.最後に

事務局の素晴らしいアレンジと心遣いに感謝しています。スワード市と帯広市の両市長や議長にもよろしくお伝えください。

もっともっと滞在していたかったと思う気持ちが強いです。人びとが自然と調和をすることができれば、工夫次第で素晴らしい環境の中で創造的な生活ができる可能性が高いスワード市です。受動ではなく能動的で自主的な行動は創造につながり、発展する可能性を秘めているスワード市でもあります。この市との姉妹都市は素晴らしい。もっとお互いに勉強しあって、豊かな町つくりに資することができればと期待しています。

ありがとうございます。

一眠り中です

市民有志との歓迎食事会

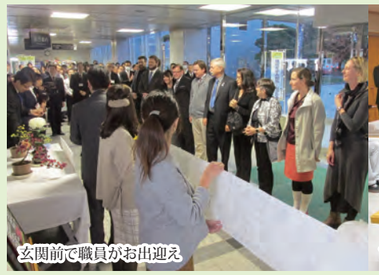
フックも桁外れの大きさで、餌も頭、背骨そしてなんとイクラまで

50周年記念事業・受入

帯広市長 帯広市議会議長 表敬訪問

平成30年10月26日、スワード市訪問団が帯広市長、帯広市議会議長をそれぞれ表敬されました。

50周年を迎えられたことと8月の訪問以来の再会を喜び、歓迎の言葉のあとは、今後の交流について話がはずみ、スクワイアーズ市長からは、特に教育について両市の連携を期待したいとの言葉がありました。議長表敬のあとは、議場を見学され、両市の議会の違いなどを視察されました。


玄関前で職員がお出迎え

市長表敬

議長表敬

スワード市 訪問団 歓迎レセプション

同日、市民の会をはじめ、スワード百年友の会、45周年時に両市に壁画を制作された帯広・スワードミューローの会、スワード市訪問団のホストファミリー、キャンベルご夫妻など約50名の皆様にお集まりいただき、スワード市訪問団の歓迎会を盛大に開催しました。

訪問団を歓迎して、市民の会からは輓馬をエッチングした花瓶を、スワード百年友の会からは漆塗りのボールペンと帯広銘菓が贈られました。1996年、1998年にそれぞれ高校生相互派遣事業に参加された廣瀬貴章さん、長谷川絵理子さんと、同時期に事業に参加されたスワード市高校生の母である訪問団員のリン・ホールさんとの再会が叶い、当時に思いをはせる様子は、半世紀におよぶ交流のかけがえのなさを改めて実感させられるものでした。後日、廣瀬さんが経営する牧場でジェラートを試食し、帯広名物を味わいながら交流を深めました。

とかち広域消防・帯広百年記念館 視察 流鏑馬競技 見学 帯広の森 散策

滞在中は、スクワイアーズ市長が元スワード市消防署長であったことから、とかち広域消防指令センターを視察され、十勝の取組を学ばれました。帯広百年記念館では、池田亨嘉学芸員のご案内で帯広市の歴史や風土を学ばれ、スワードの雄大な自然の中で暮らす訪問団員は、特に鳥の話題で盛り上がっていました。そのほか、はぐくーむの宮崎直美氏のご案内で帯広の森を散策しながら市民協働の森づくりを学んだり、帯広神社にも奉納されているグレゴリー・スチュワートさんの流鏑馬競技を見学したりしました。

十勝の取組に敬礼!

帯広の鳥に興味津々

50周年記念事業・受入

おびひろ 菊まつり 見学 スワード 市長賞 授与

2018年(平成30年)10月26日(金曜日) (第3種郵便物認可) 十勝毎日新聞

第49回 おびひろ 菊まつり 10月27日(土)~31日(水)

あす開幕 審査慎重に

「第49回おびひろ菊まつり」(帯広のまつり推進委員会主催、帯広菊花同好会共催)は27日、とかちプラザで開幕する。31日までの5日間、約2000鉢を展示し、十勝の晩秋を華やかに彩る。

開幕を控え、26日は午前8時から会場で審査会が行われた。今年の出品は「スプレー菊」「一本立て」など約500点。審査を担当する全日本菊花連盟公認指導員・審査員の高橋厳一北海道副支部長と吉田秀雄同監事が、花の大きさやバランス、乱れの無さなどを慎重に見極めた。

審査には、国際姉妹都市締結50周年で来帯中の米アラスカ州スワード市の訪問団も加わった。表彰式ではスワード市長賞の授与もある。

帯広菊花同好会の鈴木信一会長は「今年は天候に恵まれず少し遅れ気味だったが、直前に天気が回復し、気温も下がったことできれいに咲いている。多くの皆さんに見に来てほしい」と話した。

表彰式は27日午前10時20分から、同プラザで行われる。初日は午前11時から大正宮神楽保存会によるステージ、午後2時からハロウィーンコスプレツアー、同2時半からはハロウィーンファッションショーが予定されている。

菊まつりは入場無料。午前9時~午後4時まで(最終日は午後4時まで)。問い合わせは帯広観光コンベンション協会(0155・22・8600)へ。(本田龍之介)

菊の説明に耳を傾け、作品を吟味するスワード市の訪問団メンバーら(26日午前11時ごろ、新井拓海撮影)。

美味しい?

10月27日、自身もスワード市を訪れた経験があり現在も国際姉妹・友好都市から来帯される高校生のホストファミリーを引き受けてくださることもある髙井信夫帯広菊花同好会副会長にご案内をいただき、おびひろ菊まつりを見学しました。ご案内のあとは、訪問団全員の多数決によるスワード市長賞の決定ですが、全員一致で鈴木信一帯広菊花同好会会長の作品が選ばれました。文部科学大臣賞も受賞された美しい作品でした。

菊まつり会場では、市民の会の夏堀副会長、中山理事、秋場理事からお抹茶とお茶菓子をごちそうになり、日本の野点を体験することができました。

菊まつり見学後は、スワードアートカウンシル会長のバネッサ・バーヘイさんを講師に、北アメリカ北西部の先住民の彫刻柱「トーテムポール」を紙で制作するワークショップを、おびひろ動物園で開催しました。

帯広・スワードミューローの会の塩田晃さんが素晴らしい作品を披露してくださったほか、参加してくれた子どもたちとも楽しく交流することができました。 あいにくの雨でしたが、終了後は、柚原和敏園長の計らいで、象のバックヤードを見学することができました。

お茶の先生、市民の会のみなさんと

私のトーテムポール、どう?

鈴木会長と

50周年記念事業・受入

2018 フードバレーとかちマラソン

2018年(平成30年)10月26日（金曜日）（第3種郵便物認可）　十勝毎日新聞

2018 フードバレーとかちマラソン みんなが主役

新たな交流に　米スワード市3人が出場

今大会では、帯広市との国際姉妹都市締結50周年記念訪問団として来帯中の米アラスカ州スワード市の3人がランナーとして参加する。帯広側もスワード市にゆかりのある市民が出場したり、沿道で声援を送ったりする。

8月に帯広からの50周年記念訪問団の一員としてスワード市を訪れた田中一郎さん(75)は、5㌔の部に出場する。「夏にお会いした方に、また会えると思うと楽しみ。国を超えて一緒に走れるのは光栄」

スワード市からはジュレミー・ホーンさん(37)＝2・5㌔＝、ヘンリー・ウエストさん(37)＝5㌔＝、ケリー・ワイリー・レーンさん(37)＝ハーフ＝の3人が走る予定。スタートとゴール地点では28日の大会当日、同市と関わりのある帯広市民が駆け付け、沿道から応援する。

両市は1968年に国際姉妹都市締結し、高校生の相互派遣など草の根交流を続けてきた。今回のマラソンが、新たな交流の一ページをつくりそうだ。

（本田龍之介）

8月にスワード市を訪れた田中さん（左）。右はテビッド・スカイアース市長

10月28日、十勝の風物詩となりつつある大会に、スワード市から　ジェレミー・ホーン議員、ケリー・ワイリー＝レーン議員、ヘンリー・ウェストさんが参加してくださいました。

夏にスワード市を訪問した田中一郎さん、深谷かおりさんもエントリーし、両市の50周年記念訪問団員同士、気持ちをひとつに一緒に走ることができました。

会場では、市民の会をはじめ、スワード市訪問団のホストファミリーの皆様も応援に駆けつけてくださいました。マラソンの後は、森の交流館・十勝の毎年恒例イベント「森のハロウィーン」仮装コンテストの審査員も務めていただきました。

5kmに出場

2.5kmに出場

なんとハーフに出場

森のハロウィーン 2018

あっぷっぷー！

力士に扮したヘンリーさん

50周年記念事業・受入

ソーセージづくり体験・デイキャンプ昼食会兼送別会

アウトドアの本場で暮らすスワード市訪問団の皆様に、帯広市でも近年進めているアウトドア観光の取組をご覧いただく目的もあり、送別会はスノーピーク十勝ポロシリキャンプフィールドで開催しました。

スワード市訪問団が午前中に手作り体験した３種類のソーセージをメイン料理に、十勝産食材をふんだんに使用したケータリングと十勝ワインを楽しみました。

市民の会をはじめ、50周年訪問団、キャンベル紀子さん、ホストファミリーの吉田さんご夫妻・浦島さん・外山さんにもお越しいただき、別れを惜しみながらも楽しい時間を過ごすことができました。

スワード市訪問団の思い出

スワード市議員 ケリー・ワイリー＝レーンさん　Kelley Wiley Lane

ホストファミリーや帯広市を案内してくれた方々、そして地域の美しさや寛大さを教えていただいた帯広市民のみなさんのおかげで、私は一生の絆を得ることができました。

日本に行くまでは、不安でいっぱいでした。アジアには行ったことがなく、知らないことが怖かったのです。姉妹都市事業により、私は二つの家庭と過ごすことができました。どちらもとても親切で、優しくしていただきました。地元で購入できる食材の新鮮さには、とても感動しました。スーパーマーケットに行き、きれいな野菜やサーモン、初めて見るキャンディや缶コーヒーを見るのも大好きな時間でした。ある日の午後には地元の温泉に連れて行っていただき、今回の旅の中でも、特に印象的なひと時となりました。集団的で、協力的な日本人のスピリットを経験できたことも、素晴らしいことでした。市街地と美しい農村の、どちらのお宅にも滞在し、楽しむことができました。

フードバレーとかちマラソンでは、ハーフマラソンにご招待いただき感謝しています。新しい環境で好きなスポーツをする機会をいただき、本当にありがとうございました。

帯広市民のみなさん、ぜひスワードにお越しください。私の家で、こちらの生活を体験していただきたいです。帯広でいただいたおもてなしを恩返ししたいです。心からありがとう。日本の心、帯広に感謝を込めて。

廣瀬さんの牧場で

ホストファミリーと

スワードアートカウンシル会長 バネッサ・バーヘイさん　Vanessa Verhey

スワード市の代表として帯広に行くことができ、素晴らしい経験になりました。地元の人と過ごすことを本当に楽しめました。家庭の一員として受け入れていただき、とても嬉しかったです。

近藤家では、娘さんやフレンチ・ブルドッグと遊んだりと、楽しい時間を過ごしました。歓迎レセプションでは、懐かしい顔ぶれと再会することができ、そのあとはコウタさんが街中へ連れていってくれて、貴重な経験になりました。

吉田家にもお世話になり、とても素敵な家族でした。陶芸と息子さんのレストランは素晴らしかったです。

夏にスワードでお会いした方々に再会できたこともよかったです。その方々が、フードバレーマラソンやソーセージ作り、ばんえい競馬場に来てくださり、嬉しかったです。競馬は少し当たりました！　ありがとうございました。

かわいいで賞を差し上げます！

エリック・スレイターさん　Erik Slater

小っちゃくしてます!

写真が趣味のエリックさん

帯広で過ごした時間は目を見張るものでした。自然に囲まれた美しい街、食、文化、そしてそこにいる人々が私を変えました。

私にとって、今回の北海道旅行は、この1年で二度目の旅行でした。2018年1月にスノーボードをするために、初めて滞在した2週間で、北海道に恋をしました。しかし、帯広でホストファミリーと過ごしたことで、私は真に日本、北海道、そして帯広を知ることができたと思います。

日本に行き、私が一番印象的であったのは、受け入れてくれた家族でした。日本の日常生活を体験し、素晴らしい食べ物を食べ、みんなと語りあうことができました。これは最高の文化体験です。受け入れてくれた３つの家庭に心から感謝しています。いつか恩返しとして帯広からの来る方々を受け入れたいです。また会いに行きます!

キャサリン・バイヤーズさん　Catherine Byars

歓迎会でHFの久保さんと

牛舎で

あ～日本!日本とそこに暮らす特筆すべき人々との、懐かしい思い出の数々。日本に行き、永遠の友情を築けたことに心から感謝しています。

私たちを快く受け入れてくださったホストファミリーや、市民の会の熱心な会員のみなさんは、居心地のよい方々でした。久保美子さんは、100円ショップや美味しい和食を教えてくださり、一緒に買い物を楽しむことができました。

2件目のホストファミリーは和田誠さん、知香さんと3人のかわいい子どもたちでした。一緒に過ごせて本当に楽しかったです!私とケリーはたらふくご馳走になり、まるで王族のようでした!和食が大好きです!子どもたちの学校にも案内いただき、とても興味深かったです。和田さんの牧場について学んだり、温泉に行ったりもしました。ある日の夜には、小倉美喜さんの家で女子と子どもたちのパーティーをしました。そのあと、小倉ひろひとさんと美喜さんが彼らの牧場を案内してくださったことは、一生忘れられない体験となりました!

色々な意味で、スワードからの訪問団である私たちは、有名人のように歓迎されました!数々のおもてなしと用意された多様なスケジュールは、本当に素晴らしかったです。私たちのために開催された豪華な歓迎レセプションは、いまだに夢のようです。デヴィッド・キャンベル夫妻をはじめ、みなさんにお会いできてうれしかったです。

菊まつりやマラソン会場に行ったこと、流鏑馬を見たこと、ばんえい競馬場を訪れたこと、送別会を兼ねたピクニックの前に自分のソーセージを作ったことは、とてもよい思い出です!また、明治チーズファクトリーや図書館へ行ったことや、ジェラートの試食、ハロウィーンの仮装コンテストで審査員を務めたことも楽しかったです。

出会えた人と築いた友情は、想像以上に心動かされるものでした。限られた時間と状況であったにもかかわらず、効率よくきめ細かに計画された行程のおかげで、こんなたくさんのものを見ることができました。今回の忘れられない旅に、心から感謝しています!

ヘンリー・ウェストさん　Henry West

走ったあとも、
ビールは手放せないね

帯広での滞在中、私が一番好きだった瞬間は、素晴らしい時間となりました。

特筆すべきは(フードバレーマラソンの)レースの日です。その日はたくさんの素敵な人々に会うことができ、とても感動しました。5000人の参加者と一緒に走った経験は、一生忘れられません。帯広市民からの歓迎や、おもてなしを、心から感じることができました。速いランナーではありませんでしたが、この経験をとおして、今後もっと走れるように、もっと健康にならないといけないことを学びました。

10月に帯広に戻って、もう一度走りたいです。毎年、毎年、10月に戻って来て、走ることができたらよいなと思っています。

スワード港事務所　アンジェラ・シュワットフェガーさん　Angela Schwertfeger

空港に見送りに来てくれたみなさん

「私たちの姉妹都市・帯広市でのアドベンチャー」

この旅は、どの瞬間をとっても素晴らしいものでした。

国際姉妹都市の帯広市に招待され、将来に向けて更に強く結ばれた関係を築く機会を得ることができました。

山、川、海、津波の経験など、両市にはよく似た自然環境や魅力的な共通点が多いです。両市の市議会や市民は、この姉妹都市プログラムに時間をかけて絆を深めてきました。先人や未来を担う子どもたちと同様に、今に生きる私たちも、海を越えて手をつなぎ、絆を強固にしていきたいと思います。私たちが帯広で見つけた友情が、これからも長く続くことを願います。

帯広を訪問したことで、私はこの姉妹都市関係を新たな目線で見るようになりました。日本にあるこの特別な場所に、最年少の娘を行かせたいという想いで帰路につきました。将来、子どもや孫が同じように体験するであろうことや、この関係の大切さについて、次の世代へと語り継いでいってほしいです。

訪問中には、消防指令センターを見学する機会がありました。一緒に訪問した友人たちが消防服を着せてもらっている姿が、強く心に残っています。

帯広の博物館では、帯広の文化や歴史について学びました。牧場では、とても美味しいアイスクリームをいただきました。チーズファクトリーを訪問したり、協力しながらソーセージを作ったりもしました。ソーセージを作った後には、姉妹都市の新たな友人と共に、デイキャンプを楽しむことができました。

菊まつりでは、誰かがギター(三味線)で日本の伝統な曲を弾き始めました。帯広市民がそうであるように、穏やかで平和な雰囲気に包まれました。

両市には似たようなところが多いです。防災から、有機栽培を行うためのビニールハウスを用いた屋内農業まで、互いに様々な分野において情報交換することで、資源の消費を抑えることができると思います。壁を越えて、この姉妹都市関係から学べることはたくさんあるのです。

アラスカのような地方にある地域は、孤立していることで内向きになりがちです。壁を越え、海を越え、お互いに耳を傾けあうことで、更に大きなものに目を向けることができるでしょう!

改めて素晴らしい時間をありがとうございました!

スワード市MISマネジャー　マイケル・ミークスさん　Michael Meeks

姉妹都市締結50周年記念である帯広への旅は素晴らしいものでした。

この旅で、最も重要な要素はホームステイでした。私たちの素敵なホストファミリーは、私たちを受け入れ、日常生活を見せてくださいました。おもてなし、苦労、子育ての様子を見ることができて感動しました。また、多くのホストファミリーは、時間を割いて、訪問団の行事にも参加していただきました。

平成29年度、スワードに派遣された村上さんと

私たちが連れて行っていただいた場所も、同じく重要でした。博物館、図書館、競馬場などはとても素晴らしかったです。過去と現在、いずれの帯広を見ることができました。

帯広市民は私たちを温かく受け入れてくださり、歓迎されているという安心感を抱きました。マラソン大会で目にした何千人もの人々の姿も壮観でした。

一生忘れられない経験でした。スワード市と帯広市との姉妹都市締結50周年訪問団の一員として訪問させていただいたことに感謝しています。

「まだ見ぬ人はこれから出会う新しい友」
“There are no strangers here; Only friends you haven't yet met.”

世の中には数々の姉妹都市がありますが、スワード市と帯広市のように長く実績を残してきた例は、あまり多くありません。

この度私は、実行委員会の一員として、スワード市・帯広市姉妹都市締結50周年記念事業に携わる機会をいただきました。

弟を含め、たくさんの友人が帯広市との高校生相互派遣事業に参加しましたが、なぜか私は海外に行くことに興味がありませんでした。しかしながら、彼らがいかに帯広を楽しんだか、話していたことをよく覚えています。弟に加えて、私の父もスワード市副市長として訪問団で行ったことがあるし、母も帯広市開基100年記念訪問団で訪ねたことがあります。最後に帯広に行ったのが私ですが、一番長く滞在してきました。

この姉妹都市関係の最大の力は、両市からの参加者にあった影響です。私が会った高校生から大人まで全員が、必ずそれぞれの街で過ごした素晴らしい思い出を語ることができます。帯広の参加者はスワードの山やレザレクション湾でのボートクルーズ、野生動物などを、スワードの参加者は平原まつりの盆踊りや花火大会、茶道や書道の体験を。そしてもちろん、両市の参加者はそうしてできた友達と、おもてなしについて強く語ってくれます。

次の50年間にも国際友好関係・理解が続くことを願っています。

David Campbell

帯広ースワードをつなぐもの

25年前、姉妹都市提携25周年を記念し帯広市から総勢46名の親善訪問団がスワードを訪れました。

当時、まだ4歳だった息子を連れて一足先にスワード入りし、夫デイビッド・キャンベルの実家に約1ヶ月滞在しながら訪問団の到着を待ちました。その間、交流のきっかけになったボブ・リチャードソン氏、スワードで輸入業を営んでいた故川部氏の夫人川部栄子氏、最初の交換留学生だったドーリー・バーダーソンさんなど、沢山の方たちにインタビューする機会を得ました。それらの情報は『スワード便り』という特集記事にし、北海道新聞で10回に分けて報道しました。

当時帯広市の人口は17万。片やスワードは人口3000人。産業も組織も風土も全く違う帯広市からの来客を、当時「スワード国際友好協会・SIFA」というボランティア団体が町をあげて歓迎してくれたことを昨日のように覚えています。同じように、スワードからの留学生を快く受け入れてくれた市民の皆さん、訪問団の来帯のたび、準備に奔走してくださった訪問団有志の会、スワード100年友の会などの市民団体の努力無しには続かなかったかもしれません。

加えて、黒子になってデリケートな連絡連携に尽力してくれた市役所親善交流課の存在。こうやって半世紀、途切れることなく続いてきた両市の交流で生まれたのは、人と人との『絆』に尽きるのだということを30年近い関わりの中で再確認しています。関わってきた方たちの、子供、孫の世代が、築いた絆を繋いでいってくれることを祈り、これからもささやかながらエールを送り続けたいと思います。

キャンベルのりこ

絆 *Across water and over mountains, we'll surely meet again.*

編集後記

平成29年度中から、メールを中心にスワード市とのやりとりを開始し、今年度の相互派遣を迎えました。

相互派遣を通じてお会いしたスワード市の皆様は、準備の間に想像していたよりもはるかに温かく、まるで本当の姉妹のように親密で、半世紀におよぶ交流の絆の強さを実感することとなりました。

スワード市訪問時には、歓迎会や送別会の開催のほか、天候の悪い中、交流の初期から関わってくださった方々が丁寧に市内の壁画をご案内くださいました。その他市内の見学、体験時にも、担当の方はもちろん、ミクルアー議員、カサグランダ議員、ホーン議員をはじめ、多くの方々にご同行いただき、おもてなしをいただきました。

また、45周年記念壁画をはじめとして、街に溢れる帯広の痕跡を見るたび、これまでの交流を大切に思ってくださるスワード市の皆様の気持ちが伝わり、街全体でその精神を受け継いでいただいていることが感じられる良い事業となりました。

本事業にご参加くださった訪問団員の皆様、スワード市訪問団の受入にご協力くださいました関係者、ホストファミリーの皆様、また、帯広市民を温かくお迎えくださったスワード市の皆様に感謝を申し上げますとともに、この記念誌が今後、スワード市を知るきっかけとなり、両市の親善交流の豊かな発展に資することを願って、編集後記といたします。

スワード市国際姉妹都市締結50周年記念事業実行委員会　事務局